

# aiko が描く恋愛の特別性

— 「二人だけの世界」とあたしの感覚の表象について —

大阪市立大学文学部

言語文化学科 表現文化コース

2020 年度 卒業論文

A17LA130

まえださくら

前田さくら

## 目次

### 序論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1 頁

「わたしとあなたのかかわり」を言語化する/研究対象について/歌詞研究  
における本論文の位置づけ

### 本論 あたしとあなたの恋愛の特別性を描くために

#### 第一章 世俗性からの分離・・・・・・・・・・・・・・・・・・10 頁

排除されたイメージ/「クリスマス」/「男」/「社会」/「文化」としての  
恋愛

#### 第二章 「二人だけの世界」・・・・・・・・・・・・・・・・・・18 頁

「アトポス」としてのあなた/「二人だけの世界」/「あたし  
だけが知ってるあなたの特別なところ」/わたしなりの「痛覚点」

#### 第三章 あたしの感覚・・・・・・・・・・・・・・・・・・37 頁

あたしの感知した出来事/あたしの「体」/見えないものの「質感」/確実  
な触覚/あなたに「触れる」/あたしの五官/「悲しい」視覚と聴覚/怪しい  
認識/あなたの「声」/愛の感官である「鼻」と「口」/匂いと心/嗅覚が差  
し出す「あなた」/性衝動を促す香り/「味」の快楽/「あたしのものにな  
ったらいいな」/あたしの感覚の言語化という挑戦

### 結論・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・90 頁

### 参考文献一覧・・・・・・・・94 頁 参考サイト・雑誌一覧・・・・・・・・97 頁

### 参考楽曲一覧・・・・・・・・98 頁

※曲名は〈 〉、アルバム名は《 》と示す。

## 序論

### 「わたしとあなたのかかわり」を言語化する

歌は、今まで多くの「愛」を語ってきた。あらゆる国で、あらゆる音楽のジャンルで、長い時間をかけて「愛」を歌ってきた。日本の現存する最古の和歌集『万葉集』にも多くの愛の歌が収められ、現在流れているポピュラーソングでも「愛」は代表的題材である。今を生きる日本のシンガー、aikoも自身の大半の楽曲テーマを「愛」に託してきた。aikoは「あたしとあなた」の恋愛を、歌詞という言葉による表現の中でひたむきに描き続けてきたのだ。

内藤千珠子の『小説の恋愛感触』では、「特別なわたしとあなたのかかわり」を言葉で語ることは「誰もがどこかで体験したことのあるような、陳腐で平凡な出来事」におとしめられてしまうといい、言葉による愛の語りの困難を主張する<sup>1</sup>。言葉で書きつけることによって誰にとっても「わかりやすい物語やイメージ」に置き換えられる「わたしにとっての特別な感触」をなんとか言葉にしたいという、「切ない背理」を抱きながら、小説は「孤独な挑発を情熱的に継続」していると内藤は考える<sup>2</sup>。

---

<sup>1</sup> 内藤千珠子『小説の恋愛感触』みすず書房、2010年、7頁

<sup>2</sup> 内藤前掲書、8頁

「わたしとあなたのかかわり」を小説と同じように言葉で織り成そうとする歌詞はどうだろうか。歌もまた、「わたしとあなたのかかわり」をわずか数分、数十文字という、そのかかわりの初めから終わりまですべてを書きつけるには到底足りない狭い範囲で言語による表現へ挑戦し続けているといえるだろう。

「あたしとあなた」の恋愛を描き続けてきた aiko もまた、言葉による拘束を受ける中で、「孤独な挑発」をし続けているひとりではないだろうか。本論は、aiko が「あたしとあなた」の二人の物語を特別たらしめるために、どのように言葉を紡いできたのかを読み解くことを目的としている。

## 研究対象について

まず、本論で研究対象とする aiko について簡潔に解説をしておこう。aiko は、1975年11月22日生まれの大阪出身の女性歌手である。1997年にコンテストに出場し、ポニーキャニオンの音楽プロデューサーに見い出され、1998年に〈あした〉でデビューする。1999年にリリースした〈花火〉がオリコンチャートにランクインし、世間の注目を集め始める。〈花火〉のほかに、〈カブトムシ〉〈ボーイフレンド〉などが代表曲として挙げられる。これらの代表曲が今でも多くの人に愛される曲となり、現在までに13回

もの紅白出演やテレビドラマや映画主題歌の多数起用などもあり、世間からの知名度や人気度も高い女性シンガーであるといえるだろう。そして、ライブ活動やCDのリリース、TV出演も比較的頻繁に行っており、積極的な歌手活動を現在まで行っている。

aikoは2021年でデビュー23年目になるが、今までに40枚のシングルと13枚のオリジナルアルバムをリリースしている（2021年1月時点）<sup>3</sup>。そして、ファーストシングル〈あした〉以外の全230曲以上もの作詞・作曲を全て自身で手掛けている（〈あした〉は作詞のみ本人によるもの）。ちなみに、作詞・作曲の際には名義を「AIKO」としている。この論文では、aikoが今まで発表してきた楽曲全てを対象とする。

すでに述べたように、aikoは大半の楽曲のテーマが「恋愛」である。伊藤雅光の『Jポップの日本語研究 創作型人工知能のために』では、Jポップの歌詞を「ことば」として計量的分析を行っており、その分析によると、aikoの1998年から2010年4月までに発表された9枚のアルバムに収録された112作品中、「恋愛」をテーマにした作品は108作品と、96.4パーセントを占めていることが分かる。この数値は、本書の同章において分析されている、DREAM

---

<sup>3</sup> 「aikoOfficialWebsite」、<https://www.aiko.com/>、（最終閲覧日2021年1月20日）、aikoの楽曲情報はこちらを参照。

S COME TRUE の吉田美和、miwa、松田聖子、中森明菜に比べ、「恋愛」のテーマが占める割合が最も高いのが aiko であることを意味する<sup>4</sup>。

さらに、aiko は恋愛主体を示す一人称には「あたし」という、特徴的な語を多く使用している。『aiko の歌詞「あたし率」はどれくらい?』というネット記事では、2020 年 3 月 31 日までに歌詞が公開されている aiko の楽曲 236 曲を対象に、一人称「あたし」を使用している曲の割合を分析しているが、その分析によれば、「あたし」を使用する曲は 88.5%、「あたし」以外を使用している曲は 11.5% である<sup>5</sup> (ちなみに、「あたし」以外では「僕」「私」「俺」などがある)。そのためこの論文でも、恋愛主体を指示する語として、aiko が一人称として最も多く使用する「あたし」を主に用いる (恋愛対象を示す語もまた同様に、aiko の曲中で最も多く使用されている「あなた」で示していく。「君」と指示されているものは 26 曲、それ以外は「あなた」が使用されている)。

このように aiko は「恋愛」の歌を発表し続けているが、なぜそれ

---

<sup>4</sup> 伊藤雅光『J ポップの日本語研究：創作型人工知能のために』朝倉書店、2017 年、90 - 91 頁

<sup>5</sup> excite ニュース「aiko の歌詞「あたし率」はどれくらい?」、<https://www.excite.co.jp/news/article/E1585289379486/>、(最終閲覧 2020 年 12 月 20 日)

ほどラブソングを生み出し続けるのかという問いに、インタビューでこう答えている。「一番面白いから書いている。理由はそれしかない」といい、「好きな相手の心の中は一生分からない」からこそ面白いのだ、と<sup>6</sup>。

aiko は、デビュー以来「恋愛」を歌うことにこだわりと探求心を持ち続けているシンガーであることは、発表曲のラブソングの比重にも表れている。「恋愛」を歌う曲の歌詞分析の対象として、aiko というシンガーの作品を対象にして論じる意義があると考えられる。

### 歌詞研究における本論文の位置づけ

本論文は、aiko の歌詞を対象に「わたしとあなたのかかわり」の表現を探求していこうとする歌詞研究であるが、歌詞研究の研究史のなかで本論文はどのように位置づけられるだろうか。

見田宗介は『近代日本の心情の歴史』で、歌は時代の民衆の精神を反映したものであるという考えを示している。見田は、流行歌の「解釈」はその中に仮託された「真実を解読する作業でなければならな

---

<sup>6</sup>Yahoo ニュース『「胸が痛くなるような恋愛の感情は、10代の頃と今も一緒」 - aiko、ラブソングと歩んだ21年』  
<https://news.yahoo.co.jp/feature/1346> (最終閲覧 2020年12月20日)

い」という<sup>7</sup>。知識人たちの、流行歌における表現はマンネリズムや紋切り型であるとの指摘に批判を示し、民衆の心情を知ろうとする者は、この表現のうしろにある「時代の心情の深み」を掘り起こすことが課題であるとしている<sup>8</sup>。一方、ポピュラー音楽研究者である増田聡は、見田のこの考えに対して、そこで歌われる歌詞は「純粹に言語的な範疇で理解されうる言葉でしかなく、音楽の中に組み込まれた歌詞がいかなる機能を果たしているかについて語られ」ていないと批判している<sup>9</sup>。増田は、歌の背景には複雑に重層化している構造が存在するため、「音楽を分析しなければ歌詞の意味は理解でき」ず、歌詞は「それ自体が音楽の意味を表現するのではなく、音楽の意味を引き出すトリガー、ラベル、あるいはインデックス・マークとして機能する」と考える<sup>10</sup>。

増田のいうように、歌詞のみの分析によって時代の民衆の心情を包括的に捉えられるとは考えにくい。たしかに、流行歌は大衆芸術の他の諸様式と違い、「民衆が自らそれを口ずさみ、能動的に参与」できるという点で、より民衆との関係は密接なものであるという見

---

<sup>7</sup> 見田宗介『近代日本の心情の歴史』講談社、1978年、3頁

<sup>8</sup> 見田前掲書、5頁

<sup>9</sup> 増田聡『聴衆をつくる－音楽批評の解体文法』青土社、2006年、102頁

<sup>10</sup> 増田前掲書、113 - 114頁

田の考えには頷けるところがある<sup>11</sup>。だが、見田の『近代日本の心情の歴史』における「流行歌」の時代の背景が現在とは異なるため一概には言えないが、流行歌たる所以というのは歌詞だけにあるものではないだろう。人がその歌を好み、口ずさむ理由は、たとえばそのメロディのキャッチーさであったり、リズムの軽快さやまたその歌手自体への思い入れがあるためでもあるだろう。個々それぞれにその歌を好む理由があるにもかかわらず、流行歌たる所以を歌詞だけに見い出すのは尚早だろう。ポピュラー音楽の歌詞は時代を象徴するものではない、しかし、それは歌詞そのものの研究を軽視する理由にはならないだろう。歌詞研究により「音楽の意味」や「時代の民衆」を問うのではなく、「言語表現の可能性」を問うことはできるのではないだろうか。歌詞研究は「言語表現」の分析として有効であるということを私は本論文によって示したい。

ただ、現代のポピュラー音楽において「サウンド重視」<sup>12</sup>の傾向があることは事実であり、サウンドとの関連を除外して歌詞における言葉を考えることができないことは確かだ。歌に現れる言葉たちを、メロディなしで語ることはできないだろう。ただ、この論文の研究

---

<sup>11</sup> 見田前掲書、10頁

<sup>12</sup> 小川博司『音楽する社会』勁草書房、1988年、第二章「サウンド志向」参照

対象である aiko のような、「歌詞重視」のシンガーも存在する。曲を付ける前に歌詞を完成させる aiko は、歌詞を確定する際に朗読を行う。ひとつの詩として読むことで、「自分が言いたかったことがちゃんと言葉になっている」かどうかを基準として歌詞を仕上げる。たとえメロディと言葉の響きやリズムが合わなくとも、基本的に歌詞を修正することはなく、多少強引にでも言葉を入れる。彼女にとってメロディとは「歌詞をちゃんと伝えるためのもの」なのである<sup>13</sup>。さらに、aiko は 2019 年に彼女自身初のベストアルバムを発売しているが、そのアルバム名《aiko の詩。》(読み方:あいこのうた)にも、「歌」(うた)や「詞」(し)ではなく「詩」(うた)という語を使用しているのも、言葉を重視している歌手としての姿勢が表われているのだろう。歌詞は時として軽視されるものかもしれない。しかし、言葉に最たる重要性を置く彼女のようなシンガーの歌の歌詞は、言葉の表現として研究することに意義があるのではないだろうか。

この論文では、歌詞が「民衆の精神」を反映するものでもなく、「レジスタンスの誘い」<sup>14</sup>を見込むものでもなく、ましてや aiko の

---

<sup>13</sup> スイッチ・パブリッシング『SWITCH Vol.38 No.6』、「うたのことば」の aiko のインタビューから引用

<sup>14</sup> 増田聡『聴衆をつくる』は、北沢夏音が中村一義の「犬と猫」を、聴いた者がレジスタンスに駆られる歌詞だと絶賛したエピソード

恋愛観を読み解こうとするものでもない。言葉による表現にこだわる彼女の「詩」を通して、「恋愛」という言語化に困難が伴うものの言語化にどのように挑戦しているのか、その表現手法自体を問うものである。

本章の議論に入るにあたり、「特別」という語に関して留意しておくべきことがある。aikoの歌詞が、どのような言葉で「特別」な「わたしとあなたのかかわり」を表現しているのかについての分析が本論文の中心的な論点であるが、この「特別」とは、そこに描かれる恋愛や恋愛対象が他と比較して特殊であることを指すものではない。さらに、aikoの歌詞が他の歌手のものと比較して特殊であると主張したいわけでもない。「特別」とは、あたしにとっての「特別」であり、あたしだけのものであるという唯一性である。

傍からみれば、平凡でいたって普通の恋愛で、ありふれた「あなた」であっても、あたしにとっては、それらが「特別」に思えてならない、という恋する者の独特な感情。その感情を、どのようにaikoは「あたしだけ」の唯一性を保持したままで言葉に紡ぎだしているのか。本論文が論じるのはそのような問いである。

---

ドについて、「歌詞カードの助けがないと『正しく』聞き取れない」歌詞がそのようなレジスタンスに誘うことはないと批判している。増田の著書の中では、歌詞の言葉そのものがリスナーになにかしらの行動を誘発させること、という意味で用いられる。

## 本論 あたしとあなたの恋愛の特別性を描くために

### 第一章 世俗性からの分離

#### 排除されたイメージ

aiko はどのように「わたしとあなたのかかわり」を言葉の上に織り成すのだろう。あたししか知らないあなたを、あたしにしか抱き得ない感情を、言語化してしまえばありふれた物語に置き換えられてしまうというその「切ない背理」が存在するなかで、どのように言葉にしようとしているのだろう。

彼女があたしとあなたの二人の物語を、わかりやすい物語に置き換えられたくないと考えられるのは、彼女の歌詞に登場しない、表現されないイメージがあるからだ。それらの排除されたイメージをひとつずつみていきたい。

#### 「クリスマス」

aiko の歌詞には「クリスマス」という言葉、またクリスマスを隠喩するような言葉も一切登場しない。クリスマスソングは恋愛をテーマに描かれたものが多く、ラブソングの定番でもある。しかし、aiko はこれほど多くの恋愛ソングを生み出しながらも一度もクリス

マスにあたしの恋愛を託すことはなかった。

もみの木と暖炉の前 大きな犬と小さなケーキ ろうそくに火  
を灯して 2人だけで過ごす Merry X'mas

JUDY AND MARY 〈クリスマス〉

きっと君は来ない ひとりきりのクリスマス・イブ

Silent night, Holy night

山下達郎 〈クリスマス・イブ〉

これは一部のクリスマスソングの例だが、クリスマスに恋人同士で過ごす喜びを歌ったり、クリスマスに一人で過ごす寂しさ、恋愛対象を想う切なさを歌うなど、パターンはあれどクリスマスというイベントはたびたび恋愛に結び付けられて歌われている。

クリスマスの他にも「バレンタイン」「記念日」「誕生日」というような恋人同士で過ごすイメージの多いイベントを想起させるような言葉も登場しない。そのような言葉には、誰もが体験したことのあるような、既にステレオタイプとなってしまった恋愛のイメージが吸着してしまっている。誰もが知っている恋愛の物語からあたしとあなたの恋愛を遠ざけようとしているのだろうか。

## 「男」

さらに、「男」また「彼氏」という言葉も一切登場しない。恋愛対象を「男」という言葉で性別という枠に当てはめず、あたしにとっての恋愛対象はいつだって「あなた」でしかない。あなたという存在が性別という枠に関わらず分類不可能であることは後述する。

デキる男ぶんないで ハッキリしな

あたしだって デキた女なんかじゃないから いらない

中島美嘉 〈Good Bye〉

男に騙され捨てられて泣いて 痣をいくつも作ったわ

幸せばかりの恋はない そう分かってるけど

あいみょん〈幸せになりたい〉

「男」という言葉は、恋愛対象を他の「男」とちと並列に位置させ、比較の対象に陥れる。恋愛対象を「男」という枠で捉えることによって、「あなた」だから恋愛対象になるのではなく、「男」という性が恋愛対象たらしめさせる。あなたを「男」として表現することによって、あたしにとって唯一無二のあなたは、ありふれた「男」

のひとつに成り下がってしまう。

## 「社会」

aiko の歌詞における恋愛主体である「あたし」は社会の下で生きている「あたし」であることを想像させない。この世を生きるためには、たとえば、「家族」を養うため、自分が「生活」するために「仕事」をして「金」を稼ぐということは必須であり、「愛」だけで生きることにはできず、当然「あたし」も社会の構造に組み込まれざるを得ない存在である。しかし、aiko の歌詞には「社会」を想起させるような言葉（「家族」「生活」「仕事」「金」など）は使用されない。あたしは社会のもとで生きるあたしではなく、あなたの前で生きるあたししか描かれないのである。

近頃じゃ夕食の 話題でさえ仕事に 汚染されていて 様々な  
角度から物事を見ていたら自分を見失ってた

Mr.Children 〈innocent world〉

暮らしも仕事も恋も 愛の場所 しおりは挟もう

矢井田瞳 〈あなたの STORY〉

「仕事」という言葉が登場する歌詞の一例であるが、〈innocent world〉は日常の会話でさえも仕事に侵されていることに嘆き、社会に置かれることで自分を見失っていることに気付くが、もう居ない君に想いを馳せながら自分の夢や希望を抱いて進んでいこうという決心の曲である。〈あなたの STORY〉も日々疲れ、傷だらけになった「あなた」(=不特定多数の対象)のその日々にも愛は存在し、明るい未来に繋がっていくというような曲である。仕事は自身の人生を構成する一つであり、「恋」もまた、「暮らし」や「仕事」と並列される人生を構成する一つである。生きていくにあたって、仕事に日常が汚染されることも恋愛と仕事を天秤にかけるようなことも、誰しも避けては通れない道のように思えるが、aikoの歌詞における「あたし」はそのようなイメージとは一切分離されて描かれており、そこには社会の下で生きる「あたし」はいないのである。

### 「文化」としての恋愛

岸田秀は『ものぐさ精神分析』で「人間の性本能は無茶苦茶にこわれてしまっている」ため、人類自身によって編み出された文化的観念や規律によって「人間の性欲を正常な性行為に向かわせ」てい

るのだと主張している<sup>15</sup>。かつて人間は男女両性をそなえていたが、神によって両性は引き裂かれ、現在の男女別々の姿になり、二つに裂かれた人間はつねにかつての片割れを探している、というプラトンの主張<sup>16</sup>があるが、岸田はそれを「男にとって女を、女にとって男をあえてわざわざ必要不可欠な存在たらしめ」、「異性を求めさせるために文化が考案した作為」を合理化したものであると考える<sup>17</sup>。恋愛に至っても、各人の恋愛理念は心の内奥から生み出されるものではなく、たとえば恋愛映画や恋愛小説でみた恋愛像のような通俗的な起源をもっているのだと述べている<sup>18</sup>。たしかに、私たちは必ずしも性本能に従って異性と恋愛しているとは限らない。恋人がいないというステータスに劣等感を抱き、急いで恋人作りに励んだり、結婚の適齢期を迎えれば「誰かと恋愛をしなければ」と必要に駆られる思いをすることもあろう。いつのまにか私たちは「異性を求めなければいけない」という文化から自分のはみ出すことを恐れ、その恐れゆえに恋愛に駆られているのだろうか。

「クリスマスは恋人と」、「バレンタインには愛する人にチョコレートを」、というのも社会が生み出したひとつの文化である。クリス

---

<sup>15</sup> 岸田秀『ものぐさ精神分析』中公文庫、1982年、164頁

<sup>16</sup> プラトン『饗宴』久保勉訳、岩波文庫、1952年、83 - 84頁

<sup>17</sup> 岸田秀、前掲書、166頁

<sup>18</sup> 同書、175頁

マスやバレンタインという文化に、恋愛イメージが追加され、現在の日本ではそれらは恋愛の文化として周知されている。ドラマや映画、ポピュラー音楽、さまざまなメディアが、クリスマスにおける恋愛イメージを打ち出す。そのような社会の作為によって、「クリスマスは恋人と過ごしたい」、「クリスマスにひとり身だと寂しい」、などとわたしたちは考えさせられる。

恋愛は文化の産物であるという岸田の考えから言えば、「男」として表現された恋愛対象は、偶然的に運命の出会いを果たした「あなた」ではなく、文化が人類に強制させた、「女にとって必要不可欠の存在」である「男」であり、「仕事」「恋愛」「暮らし」、と恋愛をそのように並列させることは、人生において「しなければいけないこと」と文化によって定められた「恋愛」である。

aiko が排除した「クリスマス」「男」「仕事」「暮らし」には、あなただけが特別である無垢な恋愛が文化としての恋愛に汚染されてしまう危険が伴うのだ。岸田の考える「恋愛は文化の産物」がたとえ真実だとしても、aiko はあたしとあなたの交わりをその文化としての恋愛に貶めることを拒絶する。

内藤は「恋愛」という言葉は、「わたしとあなたの交わり」を通俗

化させ、反復可能なイメージに置き換えてしまうものだという<sup>19</sup>。たしかに今までみてきたように、恋愛には社会が生み出した文化という側面が吸着している。社会と手を組んでしまった「恋愛」は、「世の中の決まりごとやマニュアルに媒介」され<sup>20</sup>、「わたしとあなたのかかわり」をわかりやすいステレオタイプの物語に置き換えてしまうのである。しかし、内藤は他の言葉を充てようとしても結局「恋愛」という言葉しか見つからないため、わたしとあなたの特別な恋愛を描くことの困難を述べているのだ。

aikoもまた、そのような「恋愛」に汚染されることを拒む。なぜなら、あたしにとっての愛しいあなたは社会に還元されるものではないからだ。

---

<sup>19</sup> 内藤千珠子、前掲書、9頁

<sup>20</sup> 同書、8頁

## 第二章 「二人だけの世界」

### 「アトポス」としてのあなた

あなたがここに生きてるからあたしこんなに愛してしまった後  
戻りは決してない だから全部奪ってしまいたい 貪欲であた  
しの大きなあたしの脱出

aiko〈脱出〉

あたしのあなたへの深い想いを綴った楽曲である。この歌詞の部分では、あなたに対する欲望に溺れ、頭の中があなたに溢れてしまったあたしがここから抜け出すには、もうあなたの全てを手にするしかないのだという、少々強引だがあなたを強く愛するあたしの様子が伺える。この歌では、あなたの具体的な描写はなく、あなたをここまで愛する理由も綴られない。あたしはあなたをこれほどまでに愛してしまった理由を「あなたがここに生きてる」ことに全てを託す。これは理由の言語化の放棄である。なぜここまで愛しているのかもあたし自身も理解できず、言語化を諦めてしまった末に最後に残るのは「あなたがここに生きてる」というあなたの存在の根源的な理由なのである。なぜ、あたしは愛の理由の言語化を放棄する

のだろうか。それは、恋愛対象がそもそも言語による形容が不可能な存在であるためである。

ロラン・バルトの『恋愛のディスクール・断章』はあたしの愛を読み解くための手助けとなる著書であるが、バルトは愛する人は恋愛主体によって「アトポス」<sup>21</sup>とみなされる、と述べる。

わたしの愛する他者、わたしを魅惑する他者はアトポスである。わたしにはその人を分類することが出来ない。それが正しく「唯一者」であり、わたしの特別な欲望に奇跡的なまでに呼応する特別の「イメージ」であるからだ。わたしの真実のフィギュール<sup>22</sup>であり、ステレオタイプ（他人の真実）をもってしてはついに捉えがたいものなのである<sup>23</sup>。

わたしはあなたを形容することはできないし、わたしがどうしてここまであなたを欲するのかもついに理解することはできない。

---

<sup>21</sup> ロラン・バルト『恋愛のディスクール・断章』三好郁郎訳、みすず書房、1980年、54頁にて、「アトポス」とは、元々ソクラテスの対話者たちが彼を形容した語であると記されている。

<sup>22</sup> フィギュールとは、バルト前掲書6頁によれば、恋する者の作業中の姿を指す。「運動中の肉体の身振りをはるかに生き生きとしたやり方で捉えたもの」。

<sup>23</sup>バルト前掲書、54頁

あの人は、コンテクストなきテキストにほかならない。わたしにはもう、あの人を解読する必要はなく、その欲望もない。あの人はいわば、あの人自身の場に追加されたものである<sup>24</sup>。

わたしは恋愛対象を定義したいにも関わらず、わたしにはあの人を理解することができない。ついにはあの人を「『言語』から奪取」することで、あなたを「そうしたもの」として指定するのである<sup>25</sup>。

わたしがあの人を愛しているのは、あの人の属性のせいではなく、あの人の存在のせいなのだ。神秘主義的とすらいえそうな運動によって、わたしが、あの人がそうであるものを愛するのではなく、あの人があることを愛しているのであった<sup>26</sup>。

aiko の歌詞におけるあたしがあなたを愛する理由を「あなたがここに生きてる」ことに託したことと同じ動きが存在する。この恋愛主体の言語をバルトは「一切の判断が停止され、意味の恐怖が廃

---

<sup>24</sup> バルト前掲書、331頁

<sup>25</sup> バルト前掲書、330頁

<sup>26</sup> バルト前掲書、331頁

絶」された「愚鈍な言語」であるという<sup>27</sup>。しかし、その愚鈍さを自覚しても、言語によって形容不可能なあなたの前において、あたしは立ち尽くすしかなく、「神秘主義的な運動」をおこなうばかりである。

あたしがあなたを「男」「彼」として指示しないことは<sup>28</sup>、社会的身分としての「男」に還元され、文化としての恋愛に汚染されないためだと上述したが、それは意図的な作為によるだけではなく、そもそも恋愛対象であるあなたは分類することが不可能なのである。あなたを「男」という一般的な分類に当てはめることはできず、誰かによって「男」として捉えられたあなたを、あたしは決して共有することはできない。「男」は何十億人もいるが、あなたはひとりしかいない。あなたはあなたでしかなく、代替不可能な存在である。あなたを「男」として分類することはあたしにとっては一致することのない形容である。

aiko の歌詞におけるあたしは、あなたを愛する理由の言語化を諦めており、「男」「彼」として示さず、あなたを「分類の死」<sup>29</sup>から

---

<sup>27</sup> バルト前掲書、331頁

<sup>28</sup> 「彼」という言葉に関しては、〈雨フラシ〉という曲にて「彼女も彼しか見てないように」と、第三者である「彼女」の恋愛対象として「彼」という言葉が一度だけ使用されている。

<sup>29</sup> バルト前掲書、331頁

逃れさせている。aikoの歌詞において、あなたの具体的な性格、またバルトでいう「属性」についての言及はあまり行われぬ。では、どのようにあなたは描写されているのだろうか。ちなみに、恋愛対象の性格を分類している楽曲はたとえばこのような歌詞である。

いつも一生懸命なところ 意外と男らしいところ 友達思いなところ  
トマトが嫌いなところ たまにバカなところ 人の心配するけど  
おせっかいだけど

西野カナ〈あなたの好きなところ〉

この楽曲は題名通り、あなたの好きなところを終始綴った曲である。結局は「どんなあなたも好き」という仕舞いではあるが、あなたという存在を具体的に言語化することに成功しており、そこが「あなたの好きなところ」なのである。一方、言語化の放棄を行ったあなたは、あなたという存在をどのように捉えているのだろうか。

こんなにもこんなにも苦しくて眠れないのは あなたを愛する  
証だと言ひ聞かせてるの どれ程のものなのか計り知れないで  
しょう あなたはあなたの良く出来た世界にいるから

aiko〈瞬き〉

あなたはあたしの想う苦しきなんて理解することはできないと嘆いた歌詞である。「あなたはあなたの良く出来た世界にいる」存在であり、あたしとは存在する世界を異にしている。あなたはどんな体系にも置かれる存在ではなく、「コンテキストなきテキスト」であり、「あの人自身の場に追加されたもの」である。あなたのいる世界はあたしや他者に共有できない。これは、一般的な形容語で捉えることのできないあなたの分類不可能性を表現した言葉であると考えられる。

夜が誘う 駆け抜ける世界でああなたの事ばかり考えたら  
今日も夢に出てきてくれるかな？いい人悪い人であろうといい  
の

aiko〈いつもあたしは〉

あたしは「いい人」でも「悪い人」でも、夢に出てきてくれるならどんなあなたでもいいという。これもまた、あなたへの欲がああなたの存在自身に由来しているためである。不安を抱きながら夜を過ぐすあたしにとって、それがどんなあなたであっても、現実ではなく夢であっても、あなたの存在がここにあるということこそがあた

しを癒すのだ。

例えばあなたがいなくなったら あたしは死んでしまうのと  
あなたをいつも引き留めてしまう いつもあたしは

aiko〈いつもあたしは〉

続く歌詞では、あたしはついあなた自身の存在にあたしの生を委ねてしまう（実際はあなたには冗談めかして言っているのかもしれないが）。あなたという存在自体にあたしが生きる意味を見出すあたしにとって、あなたがどんな人かという問題は問題にすらならないのである。あなたを分類することは不可能であるが、あなたの存在に愛する理由があるあたしにとって、あなたを言語で形容することはもはや必要ないものなのである。

存在から愛されるあなたに、愛されるための性格や行動も必要ない。あなたはただそこに在るだけでいいのだ。後述もするが、「あなたの～～が好き」に当てはまるものとして描かれるものは、あなたを形容するような性格や属性ではなく、仕草やあなたの体、そしてその部位である。

頷く仕草が好きだった いつもいつも見ていたかった

aiko〈白い道〉

そのまんまのあなたの立ってる姿とか声とか仕草に 鼻の奥が  
ツーンとなる

aiko〈かばん〉

決してあなたの独自の頷き方やあなたの独特な声が、あたしがあなたを「好き」な理由にはなり得ない。「あなたが～～だから好き」というような「好き」の条件になるものではなく、「あなただから」頷く仕草も声も「好き」の対象になるのだ。仕草や声やあなたの体は、あなたを欲する理由にはならないが、愛するあなたという存在がもつものならばどのような取るに足らない部分的なものであろうと、あたしの生を揺るがすほどの愛の対象になるのである。

aiko は、「あなた」の人柄、性格、属性を指し示すような言葉を使用しない。それは、あなたという存在が分類不可能であり、あたしにとって「唯一者」であり「あなた」でしかないからである。あたしがこれほどまでに愛してしまう理由の言語化を諦め、「あなたがここに生きてる」ことにあたしの愛の全てを見出し、それゆえあなたを分類することもあたしにとってはついに必要のないものなのである。

## 「二人だけの世界」

お願い気付いて暗闇から見つけて あなただけに解る 二人だけの世界を 二人だけの印を

aiko〈すべての夜〉

aiko はあたしとあなたの二人を社会や世俗から遠ざける。誰もが知る構造下にあたしとあなたの恋愛を置くことをためらう。他者には存在を掴むことさえもできないような、あたしはあなたと「二人だけの世界」で生きることを望み、あなたにしか解らない「二人だけの印」をつくることを欲す。

ねえもっと好きって言ってよ 眠れなくなるくらい困らせてよ  
愛の形を壊してしまっってよ あなただけのものに作り上げて

(中略)

何度上げてもらってぶつかってゆだねて 一緒にいられるなら  
どんな関係でもかまわないよ

aiko〈合図〉

あたしは誰もがわかりやすい通俗的な「愛の形」を拒否する。既知の恋愛イメージから囚われることを嫌い、二人以外の誰からも解ることのできないような二人の関係を望む。あたしとあなただけが存在できる「二人だけの世界」にいたることがあたしの望みであり、外部からの干渉を一切求めない。あたしは外部からの声をいつも無視している。

荒れた頬赤くなくてもあなたはそれも好きと言ってくれる た  
とえそれが無責任に聞こえると言う人がいてもあたしはあなた  
の声しか聞こえない

aiko〈恋ひ明かす〉

一生変わらないでしょう 例えばそれがボロボロでもみんなが  
笑っても変わらないこの愛だけは

aiko〈愛だけは〉

無責任だと揶揄されようが周りに笑われ貶されようが、“一生”変  
わらない愛を貫き、もはや外部からの情報は遮断され耳にも入らな  
い。あたしは外部から隔絶された二人だけの世界を目指す。外部の  
声は二人の世界を汚染する脅威があるものなのだ。バルトは、恋愛

において「事実というものはすべて、なにかしら攻撃的なところをそなえている」<sup>30</sup>と述べている。二人以外の誰かがあなたのことを伝えるメッセージは、あなたを「他人たちの一人に還元してしまう」ため、恋愛主体はあなたとわたしの二人だけの「小宇宙」を望むのである<sup>31</sup>。

どうしてだ？重くも軽くもない世界 たった一度だけ違った顔  
を見て以来ここは無重力で誰に笑いかけてるの？

aiko〈今度までには〉

あたしは恋人であるあなたの知らない顔に出遭う（あなたがあたしと居るときになのか、あなたが他人と居るときにあたしが偶然見ってしまったものなのか、細かい状況は把握できない）。あたしは一度あなたの知らない顔を見てしまうことで、あたしとあなたの世界は途端に歪む。あたしはあなたの隣という居場所を見失い、自分が何処に在るのかもわからないような宇宙に放り出される（バルトのいう「小宇宙」ではなく、人が誰もいない広大な宇宙である）。

---

<sup>30</sup> バルト前掲書、211頁

<sup>31</sup> バルト前掲書、211頁

イメージは断固として決定的なものである。最後のことばは常にイメージがこれを発するのだ。いかなる認識をもってしても、イメージに反駁したり、これを修正したり、詮索したりすることができない<sup>32</sup>。

あなたの「違った顔」ははっきりとしたイメージで切り取られ、あたしを苦しめるものとして決定的であり、あたしの脳裏に焼き付けられる。このイメージを覆すこともできず、それ以来あなたとあたし意思疎通もうまくいかない（この曲は別れの曲、また別れを予感させる曲である）。

あなたとあたしの二人だけの世界に無かったもの、あなたの中に他人を見出すことは世界の秩序を壊すものなのである。その世界を保つ秩序はあなたとあたしの固有の秩序である。それは一切の世俗性を遮断し、社会の構造にも囚われない、まるで外が存在しないかのような、あなたが作り上げる独自の秩序である。あたしはそれに縛られることを望んでいる。恋愛がそのような世界で紡がれたものであるから、aikoが描く二人の恋愛は、二人だけに解る物語であり、またあたしにだけが感知したあなたとの交わりを描くのである。

---

<sup>32</sup> バルト前掲書、200頁

「あたしだけが知ってるあなたの特別なところ」

aikoの歌詞には度々読み手には何を意味しているのか解らない暗号のような言葉が登場する。恐らく二人の思い出が想起される言葉なのだろうが、その中に込められた意味はついに理解することができない。aikoはこの言葉の羅列でなにを語っているのだろうか。

海の底を泳いで光を遮りたい 蒼いかも解らない程下のまた下  
で日曜日も☆のリングも22日も蒼い空も長袖も家の鍵も笑っ  
た目も夢のダンスもあなたの優しい所 温度と共に蘇る

aiko〈深海冷蔵庫〉

目覚ましの音 手紙のごめんね 心の信号 日曜日の夕方 ほ  
つれたボタンに絡まる思い出 あなたとあたしは今日もさよう  
なら

aiko〈卒業式〉

一体「日曜日」が「目覚ましの音」があなたとあたしの間でどの  
ような思い出を刻むのかは読み取ることができない。この暗号の意  
味を理解できるのは、あたしだけか、またあたとあなただけなの

である。このように、「二人だけの世界」の外部にいる者にとってはわからない言葉で物語の要素を語る。外部からの理解を遠ざけ、「誰にとってもわかりやすい」物語にされないように、「あなただけに解る」ものとして物語を不可侵なものにする。

公園の砂と滑り台イチジクの実  
は汗のまつげ わずかな時の中  
にいつも思い出がありました

aiko 〈ドレミ〉

今年の夏の境目 絶対に忘れてはしない  
初めて袖を通した  
Tシャツ 頬の色 あたしだけが知っている  
あなたの特別な  
ところ 心の隅に置いて時々開けるの

aiko 〈リズム〉

「イチジクの実」を見てあなたのまつげの汗みたいだと思うように、傍から見れば意味の見出しようがないものにもあなたとの思い出を探す。今年の夏の境目に着たTシャツや頬が、なぜあたしにとって「絶対に忘れてはしない」ようなことになり得るのかもわからない。あたしにとっての思い出になり得る理由は「あたしだけが知っている」のだ。外部の者からは決して知るはずも解りようもな

い、あたしだけにしか価値が解らない宝箱を時々開けること、つまり歌詞にすることによってその宝物たちを慈しんでいるのではないだろうか。aikoは誰にも解らないにもかかわらず、その思い出たちを言語化し、歌詞にする。そのことによって、歌に表出されるあたしとあなたの物語を唯一たらしめているのだ。

歌詞という少ない文字数の中で恋愛を綴らなければいけないという弱点を逆手に取り、あえて具体的な言及を一切取り除いた短い言葉たちを使用することは、歌詞というフィールドの中で特別な「わたしとあなたのかかわり」を描くための aiko のひとつの戦略である。

### わたしなりの「痛覚点」

わざと通らない様にしてた道だって いつも買って帰ってたガムだってもうすぐ着くから待っててね あなたの顔が頭の中で  
心の中で僕に笑いかける

aiko〈透明ドロップ〉

袖を通すことのない水玉シャツ あれ以来あれ以来  
最後に逢ったあの日は鮮明で今のあたしには悪い夢の

様

aiko〈水玉シャツ〉

恋する者は「わたしなりの『痛覚点』」を持っている<sup>33</sup>。わたしだけが持つ痛点は他の者には理解し難いものである。あたしは(〈透明ドロップ〉の一人称は「僕」であるが、ややこしさを避けるため「あたし」で統一している)別れたあなたとの日々を思い出してしまうような「道」や「ガム」を極力避けて過ごしており、最後に逢った日に着ていたのかあなたに貰ったものなのか、自分の持っていた「水玉シャツ」ももう着られなくなっている。ここでもまた、その「道」や「ガム」や「水玉シャツ」が具体的にどうあなたと関わりがあるのかは明かされることはない。あたしを苦しませるわたしなりの痛覚点もまた、明確な意味を指し示すこともないまま提示され、あたしだけのものたらしめている。

避ける痛覚点ではなく探し求める痛覚点もある。それはあたしの心を震わせるあなたのなにかである。

わたしを射止める矢は、日常性の小片というか、この上なく捉

---

<sup>33</sup> バルト前掲書、144頁

えがたい瞬間の身振りと言うか、要するにひとつの「スケーマ」  
(運動中の肉体、特定状況下の肉体、生きている肉体)にかかわるものなのである<sup>34</sup>。

aiko の歌詞には体の部位を表す単語が非常に多く使われている。その範囲は広く、ごく部分的な場所にまでわたっている(ちなみに既出の記事であるが、『aiko の「あたし」率はどれくらい?』<sup>35</sup>で歌詞に出てくる体の部位の回数データが掲載されている。それによると、目が最多の123回、手が95回、顔が65回というのが上位の3つである)。aiko の歌詞におけるあなたの肉体は、また部分的な肉体はあたしの心をどうしても震わせ、あたしの欲望を向かわせるものである。

力の抜けた右手が好き　それで優しく頬を触って

aiko〈大切な今〉

赤く染まる指先や頬を生まれ変わっても見ていたい

---

<sup>34</sup> バルト前掲書、286頁

<sup>35</sup> 前掲記事

<https://www.excite.co.jp/news/article/E1585289379486/>

aiko〈スター〉

ずっと上向いて何を思っているの？あなたの目が好きだった

aiko〈戻れない明日〉

息を止めて見つめる先には長いまつげが揺れてる

aiko 〈カブトムシ〉

“力の抜けた”右手、“赤く染まる”指先、頬、“上を向いた”目、にあたしは愛しさを感じる。ここで驚かされることは、あなたの肉体に対するあたしの細かい観察である。あなたのまつげというごく些細な部分にも意識は注がれており、あなたの肉体の細かい変化も見逃さない。そのようなあなたのごく部分的な肉体に「息を止めて見つめる」ほど、あたしの心は惹きつけられてしまうのである。常にあなたを注視しているあたしだからこそその「あたしだけが知っているあなたの特別なところ」なのであり、それらは「生まれ変わっても見たい」ほどの、あたしだけの宝物になるのだ。

恋する者は「わたしなりの『痛覚点』」に非常に過敏である。他の人が素通りするようなことに胸を大変痛めるのだし、他の人が気付かないようなものに大変心を捕らえられるのである。それは第三者

である他人には決して理解されることがない思いである。恋する者が持つあの独特な感性を、aiko は歌詞に表出させようとするのだ。

### 第三章 あたしの感覚

#### あたしの感知した出来事

aiko は、特別なあなたとのかかわりを描くために、あたしの感覚を歌詞において表現しようとする（上述したように、体の部位の言葉が多く使用されていることは、あたしの感覚を描いていることも理由のひとつである）。感覚とは本質的に主観的なはたらきであり、あたしが感知したことはあたしにしか体験することはできない。aiko は、あたしが体験したあなたとの交わりの質感を現前させるために、繊細にあたしの感覚を描こうとしている。あたしだけが知るあたしの感覚体験を繊細に描くことによって、あたしとあなたの物語は主観性を帯びる。つまり、客観的ではない、誰にでもわかるありふれた物語に変換できない物語となる。

あたしの感覚なしで、あたしとあなたのかかわりを語ろうとすれば、抽象的で現実味も持たない、誰にだって当てはまり得る物語になる。あたしの感覚で語ることによって、あたしの恋愛はあたしだけの恋愛となる。その歌詞のなかにおける感覚体験がどのように機能しているのか、また感覚はなにを表現しているのかを考える前に、そもそも「感覚」はどう定義されているのかについて言及する必要がある。

感覚の数は異なる文化や感覚の人類学者によって提唱しているものは異なる。現代では、科学者が感覚の候補となるものを数多く発見しており、彼らの中には三三の感覚があると唱える者もいる。それら感覚の候補としては、平衡感覚や血圧、想像力、記憶力…などが挙げられる<sup>36</sup>。このように「感覚」が指すものの解釈は多様であるが、この論文で「感覚」が指すものは、アリストテレスが五感と定義した、視覚、聴覚、味覚、嗅覚、触覚を中心に<sup>37</sup>、さらに触覚は、痛覚や温度感覚を伴う皮膚感覚として広く捉えたい。

人間がどのように物事を知るかについて研究する分野である認識論は、「感覚論」と呼ばれ、人間は感覚によってあらゆるものを経験し、その感覚体験を通じて知識を獲得すると主張される。さらに、屋良朝彦によれば、フランスの哲学者メルロ＝ポンティは「「知覚」こそが事物や他者や自己を含めたあらゆる存在者の〈存在〉を与える根源的な機能を果たしている」と考えたという<sup>38</sup>。つまり、どのような存在者も知覚の外部に存在することはあり得ず、知覚されるからこそ存在者は存在し得るのだ。わたしたち人間は他者とお互いに

---

<sup>36</sup> キャロリン・パーネル『見ることは信じることではない啓蒙主義の驚くべき感覚世界』藤井千絵訳、白水社、2019年、118頁

<sup>37</sup> アリストテレス『魂について』中畑正志訳、京都大学学術出版会、2001年、124頁

<sup>38</sup> 屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス－他者への覚醒』東信堂、2003年、3頁

知覚し合い、交流することで「わたしは自己の身体を自己のものとして同定」でき、「他者にも認知されることによって、自己の身体となりうる」のである<sup>39</sup>。

感覚は人間の内なる自己と外の世界をつなげる役割を担う。つまり、他者との交流において自己の身体による知覚体験は必ず生まれる。あたしとあなたの交流にも無論、豊穡な感覚体験が生まれている。

aiko は、あたしとあなたを外部から隔絶させた。それは、二人が紡ぐ恋愛を誰にも侵させたくなかったためだ。その「二人だけの世界」における体験は、その世界の語り手であるあたしが語るほかない。ある日のあなたとの思い出を暗号のような言葉で語り、一瞬のあなたとの交わりをあたしの感覚で語る。では、あたしの感覚によってその交わりをどのように語るのか。

## あたしの「体」

毎日あたしの体があなたで形成されていきます 羽根いっぱい  
のプール 泳いでいるような めちゃくちゃな嬉しい日々

---

<sup>39</sup> 同書、72 頁

aiko 〈愛は勝手〉

身体は、「『心』という『はたらき』の唯一の実現の座であり、その物質的実在性をよりどころとして、私と世界との「開かれ」を媒介する」<sup>40</sup>ものであり、「心」なるものを他者と共有するためには何らかの身体表現が必要である<sup>41</sup>、と小浜逸郎は主張する。あたしの身体は、あたしとあなたのかかわりにおける唯一の媒介物である。あなたとの「嬉しい日々」はあたしの心を、そしてその心の座であるあたしの体までも変えていく。

髪の手先から足の手先から細胞分裂　口紅も香水もかたことかたこと壊して全部

aiko 〈心焼け〉

細胞分裂とは、一個の細胞が分裂して二個以上の独立した細胞になることである<sup>42</sup>。詳しい働きについての記述はしないが、ここでの

---

<sup>40</sup> 小浜逸郎『「恋する身体」の人間学』筑摩書房、2003年、96頁

<sup>41</sup> 小浜逸郎『エロス身体論』平凡社、2004年、115頁

<sup>42</sup> 「公益社団法人日本薬学会 薬学用語解説」、<https://www.pharm.or.jp/dictionary/wiki.cgi?細胞分裂>、(最終閲覧 2020年12月14日)

「細胞分裂」は、体の変化を意味しているだろう。あたしはあなたと別れた後も（あくまで推測の域を出ないが）、あなたのことばかりを考えてしまいあなたの消失を嘆いている。あなたの消失は、あたしの「髪の手先から足の手先」までの体の隅々を変えてしまうような影響をもたらす。

さらに、あなたという存在はあたしの体へ影響を与えるどころか一から体を作り上げてしまう力を持つものとして描かれる。

あなたの言葉ひとつひとつで今のあたしが出来てると知った時

（中略）毎日胸の中は形も色も音すらも変える

aiko〈恋愛〉

あなたの言葉や存在は、あなたへの「開かれ」の座であるあたしの身体を一から形成することも、内部から破壊と変化をもたらすこともできる。あなたはあたしの存在自体を左右する者であり、あたしの存在もまたあなたに依拠する部分が多い。

身体への影響は、つまりそれを有するあたしの感覚にも影響を及ぼす。あたしが持つ感覚は、あなたのせいで過敏に働きまわっている。

## 見えないものの「質感」

あたしの身体がどれほどあなたに影響を及ぼされ、あたしの身体があなたとのかかわりの上でどれほど密接なものであるかは上述した歌詞で伺えたが、さらにここで注目したいのは〈恋愛〉における「胸の中」の表現である。

aikoは胸の中という抽象的な場所を、視覚（または触覚）情報である形や色、聴覚情報である音という感覚体験によって、抽象的で実体のない「胸の中」の輪郭を浮かび上がらせる。非物質的存在をあたしの感覚によって紐づけることによって、その存在に質感を与えている。

あなたのいる夢の所は今何時？ あなたの指で紡ぐ文字 くち  
びるを滑る言葉

aiko〈甘い絨毯〉

文字は視覚で捉えることができ、言葉は聴覚で捉えることができる。しかし、ここでの試みは文字や言葉に触感を与えようとするものである。あたしは、「あなたのいる夢」が何時なのかを聞きたいぐらいに、あなたのどんな小さなところにも全て興味が注がれ、全てを愛おしく感じている。あなたの文字も言葉も愛の対象の例外では

ない。文字を読んであなたの愛しい指に思いを馳せ、言葉を聞いてあなたの愛しい唇を想像する。文字や言葉は非物質的な存在だが、たしかにあなたの指や唇はそこに触れたのだ。あたしはあなたが接触した文字や言葉を愛撫するかのように慈しむ。

見えない不確かな存在である「愛」にも aiko は感触を与える。aiko は、あなたからあたしに向けられる愛、あたしの心、あたしの愛に温度を与える。

始まりしか知りたくない終わりなどいらぬ あなたの胸にあ  
たしをしまい込んで ねえこのかたまり冷えた心を今すぐ燃え  
溶かしてよ

aiko〈彼の落書き〉

あなたの愛は、凍ってしまったかのような「かたまり」の心を、燃やすほどの熱さを持つものとして描かれる。ただ、「熱い」や「温かい」は、実際に温度が高いものとしてではなく、「アツいイベント」「温かい人」などイメージを形容する語として使われることも多い。実際、熱いものやあたたかいものに触れたときと、冷たいものに触れたときとで初対面の人への印象などに違いがあり、より熱いカップを持った人の方が、心が温かい人だと判断する傾向が強いという

実験がある<sup>43</sup>。そのように、温度的な表現は人の心を表象するためにたびたび使用される。

〈彼の落書き〉において、“心”を「かたまり」という物質的な存在にすることで、文字通りの意味で燃やすことが出来る可燃物として表現されており、「見えない」心という存在が物質的実在性をもつに至る。しかし、温度表現は抽象的表現になりがちである。そこで、aikoはその「熱」にさらに触感を与える。

ピアスの裏側に隠した熱がこぼれ落ちて指をつたい戻れないと  
泣いてる

aiko〈4秒〉

この曲はあなたとの電話がメインに描写されており、あなたの声を捉えた耳のあたり、「ピアスの裏側」に「熱」がある。あなたから受け取った愛なのかあたしが伝えきれなかった愛なのかは定かではないが、「熱」という形がないものに対し、「こぼれ落ち」る、「つた」う、「泣いてる」という表現を与えている。実際には感触や感情のな

---

<sup>43</sup> 傳田光洋『皮膚感覚と人間のこころ』新潮社、2013年、16頁によるとアメリカのコロラド大学のウィリアムズ博士とイエール大学のバーグ博士が行った実験である。

い「熱」に確かに触れることができるような形を与え、ついには泣くものとして擬人化される。今まで見えなかった「愛」や「想い」は「熱」と表現され、その「熱」を象る輪郭を与えられ、そして感情をも持つにいたる。あたしを含め恋愛主体なる者は、ただでさえ人の気持ちという移ろいやすいものからなる、視覚で捉えることができない「愛」や「想い」という不確かな存在に不安を抱いている。できればそれらを手にとって触れて存在を確かめて、そして愛おしみたいのである。aikoがこのように「愛」や「想い」、それを伴う「文字」や「言葉」などの見えないものに確かな触感を与えることは、このような願いによるものなのだろうか。確かめたいという願いを託す、触感、つまりその触覚のはたらきはわたしたちになにを与えるのか。

## 確実な触覚

盗んだ心をどう扱っているの？毎日何回触ってくれているの？

こんなあたしとずっと一緒にいたいなの？

aiko〈愛は勝手〉

ここでもやはり見えない存在であるあたしの心を触れることがで

きるものかのように表しており、「心を触られる」ことを切望している。触覚は、触れることは、あたしにどんな意味を与えるのか。

触覚はわたしたちに確実性を与えるものであると考えられてきた。触覚によってわたしたちは、世界を確信をもって捉えることができるのだ。ルソーによれば、「触覚による判断はもっとも確実」であり、外部の物体がわたしたちの体にあたえる印象をもっともよく教えてくれるもの」である<sup>44</sup>。カントにおいても触覚は「直接的な外的知覚についての唯一の器官」であり、「この感官がなければ私たちは物体の形態について全く何の理解をも得ることが出来ない」と主張する<sup>45</sup>。アリストテレスは、人間の持つ触覚は他の動物よりも優れており、「人間の持つ諸感覚の中でこの触覚という感覚が最も精密である」と主張する<sup>46</sup>。外部世界の認識の主な役割を担うのは視覚であるが、触覚は視覚の不完全さを補完する。視覚情報は、脳において処理され認識されるが、その際に問題が生じ、見えないものが見えたり、実際とは異なるように見える場合があることを認知科学が指摘している<sup>47</sup>。視覚が引き起こす誤りは触覚が是正する。大森荘蔵は、目に

---

<sup>44</sup> ルソー『エミール（上）』今野一雄訳、岩波書店、1962年、297頁－298頁

<sup>45</sup> カント『カント全集 人間学』渋谷治美・高橋克也訳、岩波書店、2003年、73頁

<sup>46</sup> アリストテレス、前掲書、106頁

<sup>47</sup> 傳田光洋、前掲書、150頁

見えるものが実在するとは限らないが、「『さわる』ことには幻はありえない」といい、触れられるものこそが「現実」と呼べるものだと主張している<sup>48</sup>。

鼓動の奥へ連れてってそして確かめて欲しい そばにいる事を  
触って解って欲しい

aiko〈くちびる〉

不思議な箱に入った二人 もう出れなくなっても ひとつひとつ  
触って 暗闇の中慣れたら 一度あたしの目を見て

aiko〈瞬き〉

あたしを触ることであたしの存在を確かめることをあなたに要求している。あたしもまたあなたに触れることで「自己の身体を自己のものとして同定」することができるのだ。そしてその存在を確かめることに最も適した感覚が、确实性と精密性に定評のある触覚なのである。そのため、「鼓動の奥」や「不思議な箱」のような自分の位置する場所が不確定であるとき、あたしは「触って」と願う

---

<sup>48</sup> 大森荘蔵『大森荘蔵著作集 第五巻』岩波書店、1999年、10頁

のだ。

またあたしは触覚と同じ皮膚感覚である痛覚にも、あたしに実感を与える役割として期待している<sup>49</sup>。

下唇痛い程 噛んで覚えておこう あなたに触れた時は心の擦り傷の様 炭酸水が喉に染みるけど心地いい 少し離れた距離にある好きなその目 ああ今日は夢じゃなかった

aiko〈キスの息〉

非現実的な嬉しい出来事や驚くべき出来事を前にすると、夢ではないかと確かめるために人間は頬をつねるという古くからの習慣のようなものがあるが、〈キスの息〉でもあなたと過ごした夢のような幸せな今日を、痛みによって現実であることを確かめている。下唇を噛むこと、擦り傷、喉に染みる炭酸、どれも痛みを覚えた感覚体験として描かれている。「炭酸水」は aiko の歌詞においてよく出て来るモチーフでもある。

---

<sup>49</sup> 山口創『皮膚感覚の不思議 「皮膚」と「心」の身体心理学』講談社、2006年、17頁で触覚、痛覚、温度覚はどれも同じ皮膚感覚の中の一つとして示されている。

初めて飲んだサイダーが喉を刺したその向こうに きみの笑う  
顔が見えた

aiko 〈ドレミ〉

「少し離れた距離にある好きなその目」や「きみの笑う顔」は炭酸が喉に通る感覚と共に描かれる。痛みは、科学的に記憶と密接に関係している。痛みを感じたときに増えるノシセプチンというペプチドの一種は記憶や学習と関与している<sup>50</sup>。つまり、あなたとの思い出を痛みによって自身に記憶させようとしており、また、痛みの感覚が「きみの笑う顔」を鮮明に思い出させているのだ。

チカチカ 12色の光が部屋の中を回る 足のつま先が冷たい  
今もあたしはあたしと覚えてたい

aiko〈キスが巡る〉

床の冷たさを感知するあたしの皮膚感覚もまた「あたし」を「あたし」たらしめる感覚として機能している。つま先の冷たさは、時間の経過と感覚があるという「感覚」を教えてくれる。それは、確か

---

<sup>50</sup> 山口創、前掲書、84頁

にあたしがあなたと現実の時間を過ごした証拠として機能してくれるものだ。

このように、あたしの触覚、痛覚、温度覚を伴う皮膚感覚はあたしに実感を与える重要な意味を持って機能している。あたしはあなたとのかかわりにおいて、常に不安を抱いている。そんな不安を抱くあたしにとっていつも実感を伴ってやってくる皮膚感覚は大きな安心をもたらすものである。見えないものに触感をあたえることによって、抽象的な存在だったものが愛撫の対象になることができ、または形として残すことの出来ない不確かな体験に皮膚感覚の体験を付与することによって、より生々しい実感をもって現実化させる。あたしが皮膚感覚をこれほど求めることは、見ることの出来るものをただ信じることができないあたしの不安が表面化したものであると考えることもできる。

### あなたに「触れる」

触覚はわれわれに確信を与える感覚であると同時に親和の感覚でもある。見えない者に対する触感を述べてきたが、触覚とは本来主体と客体が同時に存在しなければ成立しないものである。

愛するものに触られることには喜びを感じるが、全くの他人から触られることは大抵の場合、不快や恐怖を感じることに繋がる。

ダイアン・アッカーマンは「誰かに触れることは相手をファースト  
ネームで呼ぶようなものだ」<sup>51</sup>というように、触れることは親しい関  
係の上だからこそ許される、リスクを伴う行為なのだ。しかし、ミ  
ッシェル・セールは「接触を拒絶するならば、何人も決して統治さ  
れず、戦う事も、愛し合う事も、知り合うことも決してない」<sup>52</sup>と主  
張する。リスクを伴う行為の反面、接触という行為は親密な関係を  
築く為には、特に恋人関係においては必要不可欠な行為である。

膝の横に置いた手の距離 数センチ 長くて愛おしかっ  
た

aiko〈夏バテ〉

あたしもまた接触行為には慎重な姿勢をみせている。数センチの  
距離を「長い」と思うほど、容易にあなたの手に触れることは出来  
ない。あなたに拒絶されるかもしれないという恐怖と、それでもあ  
なたに触れたいという欲望の葛藤の狭間であたしは戦っている。「恋  
する者には、あらゆる接触がいかにとの問いを惹起する。肌には答

---

<sup>51</sup> ダイアン・アッカーマン『感覚の博物誌』岩崎徹・原田大介  
訳、河出書房新社、1996年、158頁

<sup>52</sup> ミッシェル・セール『五感 混合体の哲学』米山親能訳、法政  
大学出版、1991年、33頁

えを返すことが要請されているのだ」とロラン・バルトが言うように<sup>53</sup>、その接触が望まないものであれ、また望むものであれども、受容か拒絶かの答えは必ず示される。それはまるで告白かのようなものである。越えてしまえば、もう戻れない一線なのである。そのリスクを考えるからこそあと数センチをためらう。

松浦寿輝は、触れるという体験は、「自分と自分ならざるものとの距離が零になること」であり、「主体としてのわたしの自己同一性を不意にあいまいにする逸脱体験」であると考えている。「わたしは〈外〉へと、わたしならざるものへといくぶんか溢れ出さざるをえない」ため、「接触とは、微小なオーガズムに似ている」のだ<sup>54</sup>。

あたしがあなたに触れることは、あなたがあたしの中へと犯してくるような、またあたしがあなたへ浸食していくような感覚を覚える体験である。あなたとあたしの境界を曖昧にし、溶かし合うようなその体験は、あたしに快楽を与えるものであり、あなたと限りなく距離を縮めたいという願いをかなえるものである。

夢中になる前に解って良かった　もう一度だけ手が触れた後だ

---

<sup>53</sup> ロラン・バルト、前掲書、101頁

<sup>54</sup> 松浦寿輝『謎・死・闘ーフランス文学論集成』筑摩書房、1997年、144頁

ったら きっとダメだっただろう 怖くなってただろう 止ま  
らぬ想いに 止まらぬ想いに

aiko〈二人〉

下唇噛んでても強く指丸めてみても 手が触れたらたちくらむ  
あなたへの満タンなメーター

aiko〈親指の使い方〉

接触行為はリスクを大きく伴う行為ではあるが、一度そのあなたとの融合という快感を体験してしまえば、あたしの欲望を必死に制御していた理性は機能不全となり、欲望は一気に加速を極めてしまう。恋愛主体にとって、あなたへの接触はハイリスクハイリターンな行為である。しかし、あなたとひとつになりたいという欲望をもつあたしにとって、融合感覚を伴う接触は、理性を抑圧しようとするあたしを誘惑する。

原田武が言うように、何らかの「心」が加わらないことはありえない接触行為は、「皮膚「表面」の出来事でありながら、つねに「深部」への働きを含む」<sup>55</sup>。レヴィナスは「愛撫は探求し探索する。愛

---

<sup>55</sup> 原田武『プルースト 感覚の織りなす世界』青山社、2006年、130頁

撫は開示する志向性ではなく、探求する志向性なのである」<sup>56</sup>と考える。触れることによって、あたしを象る輪郭からあたしは逸脱し、あなたへとはみ出していく。これはあなたの内面への探求である。

あなたの膝に手を乗せるのは 通じ合わない体温全てを感じたいから

aiko〈恋人同士〉

だからあなたの肌を触らせてよ わからないから触らせてよ

aiko〈だから〉

ここであなたに触れる理由は、あなたがわからないからである。他者であるあなたとの完全な合一は、お互いに自己を持つ人間であるため、不可能な試みだ。あなたをわかりたいと願いながらも、完全に理解することはできない、あなたを所有したいと思えども、あなたを手に入れることはついに叶わない。

〈だから〉は、「あたしはあなたになれない」と歌い、それを自覚し、そのわからなさがあたしを時に悲しませるが、だからこそ楽し

---

<sup>56</sup> レヴィナス『全体性と無限』合田正人訳、国文社、1989年、289頁

いのだと、お互いの他者性が他者性のままあり続けることを肯定するような歌である。

ただ、あなたのことを決して解ることができないと理解を放棄するのではなく、解らないからこそ、あなたの深部へ働きかけ、内部を追求しようとする試みである接触を図る。接触行為はお互いの存在を侵食し合い、ひとつになったかのように感じさせるが、決して実際にあなたとの完全な融合は叶わない。しかし、レヴィナスの他者論をふまえて、屋良朝彦は「他者は感じられるものであるだけでなく、わたしから分離した感じる者として現れてくるのでなければ、わたしの官能を煽らない」<sup>57</sup>という。あたしがあなたに強く惹きつけられるのは、あなたが「あなた」という絶対的な他者であるからだ。わからないからこそ、あたしはあなたを求める。あたしは、わからないあなたに少しでもわかりたいという願いを、あなたとの触れあいに託しているのだ。

## あたしの五官

これまで aiko の描く触覚体験について述べてきたが、他の五感について検討に移ろう。aiko はあたしの五感についてこのように歌っ

---

<sup>57</sup> 屋良朝彦、前掲書、117 頁

ている。

嫌なことだけ見えない目と悲しいことは聞こえない耳 そんなものあるはずないしそんなものなんて欲しくもない あなたの匂いを大好きな あなたの体を大好きな あたしの鼻とこの唇  
それで十分だったの

aiko〈何時何分〉

嫌なこと悲しいことを見える目聞こえる耳 あなたの匂い愛しく吸い込む口 指先は愛の塊 あたしだけのすべり台

aiko〈染まる夢〉

まとめると、目と耳は「嫌なこと」や「悲しいこと」を捉えてしまうもの、鼻と唇（口）はあなたの匂いや体、大好きなあなたを体内に取り入れるもの、そしてあなたに触れるものとして指先が示されている。つまり視聴覚はあたしが求めている情報をあたしに与え悲しませるもの、嗅覚・味覚・触覚はあなたへの愛の感覚なのである（〈何時何分〉の「唇」はあなたに触れるものとしての「唇」であり触覚として機能しているとも考えられる）。触覚は上述してきたように、あたしに確実性とあなたの内部への追求を可能にするもの

として機能している。〈染まる夢〉において触覚の代表として「指先」が提示されている。無論、指先はわれわれが何かに触れるときに最も使用する部位であり、世界と自己との媒介物と言ってよいだろう。他の部位に比べて触受容器の密度もかなり高くなっており識別能力も優れている<sup>58</sup>。同様に〈何時何分〉に現れる「唇」もまた識別能力の高い部位であり、やはり触覚機能が強調される。さらに、指先はクリトリスやペニス、足の裏や乳首と並んで、性感と関わりをもつ受容器であるマイスナー小体とパチニ正体を多く持つ部分であると言われており、指先は性感帯のひとつであることから、「愛の塊」と表現されていることは頷ける<sup>59</sup>。

あたしの五感の表現をみると、あなたとの触れあいにおいては視聴覚よりも他の感覚が重要視されているように考えられる。しかし、五感の序列として一般的な受け入れられ方としては視覚と聴覚は精神的な役割を担える「高次」の感覚であり、嗅覚・味覚・触覚は動物的な「低次」の感覚だと考えられている場合が多い<sup>60</sup>。だが、aikoは「大好きな」あなたを感知するためのものとして、鼻と口唇を位置づける。あたしの嗅覚と味覚がどのようにあなたとのかかわりの

---

<sup>58</sup> 山口創、前掲書、45頁

<sup>59</sup> 同書、175頁

<sup>60</sup> 原田武、前掲書、13頁

中ではたらくのかを注目する必要があるだろう。その前に、改めて「目」と「耳」がどうして「嫌なこと」「悲しいこと」を捉えるものとして表現されるのかを視聴覚の特性を通じて考えてみたい。

### 「悲しい」視覚と聴覚

五感を通じて獲得される情報量のほぼ80パーセント以上が視覚によるものであり、目は弁別と分析と判断の道具として今日の社会を生きる上で最有力の器官であるという<sup>61</sup>。視覚と聴覚は主体と対象に距離があっても働く感覚であり、直接対象と触れ合わなくても遠くから聞いたり見たりすることで認識が可能である。その視聴覚情報を主に私たちは外部の世界を認識しており、人間の意識はその情報をもとに「客観的に自己に有利な意思決定」<sup>62</sup>を行おうとする。

視覚はその“客観性”ゆえ、「冷たい」と評されることもある。シャンタル・ジャケは「嗅覚は内面性と深さの感覚」だと主張する一方で視覚は「物の表面に留まる」感覚であるという<sup>63</sup>。ロラン・バルトは、「写真をよく見るためには、写真から顔を上げてしまうか、または目を閉じてしまう方がよい」といい、客観性に左右される視覚か

---

<sup>61</sup> 同書、14頁

<sup>62</sup> 傳田光洋、前掲書、148頁

<sup>63</sup> シャンタル・ジャケ『匂いの哲学—香りたつ美と芸術の世界』岩崎陽子監訳、北村未央訳、晃洋書店、2015年、98頁

ら逃れ、目を閉じることで絶対的な主観性が得ることができると考えた<sup>64</sup>。原田は「視覚の冷たさ、性急さを中和し、根拠のない客観性の呪縛から逃れるために」、「より身体に近く密着した感覚の働き」が今日では求められると説いた。

このような視覚や聴覚は、どのようにしてあたしを悲しみに導くのか。

### 怪しい認識

あたしは認識の中心的役割を担うあなたの視覚に映ることを願っている。

答えは既に見つかっている あなたのその目に映して欲しいだけさ  
声を掛けてみよう触れてみよう 胸が鳴り始めた 愛に  
...

aiko〈その目に映して〉

この曲は、「遠くで見えますから声は掛けませんが以上も以下もなくただ想っています」というフレーズを含み、あたしがあなたに対

---

<sup>64</sup> ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1985年、67頁

し密かに恋心を抱いている様子が歌われる。「以上も以下もなく」想っていたあたしが最初に抱いた欲望は、あなたの目にあたしを映してもらうことである。視覚は意志と密接な関係をもち、認識の第一歩となる「その目に映されること」は、つまりあたしとあなたの関係の始まりである。しかし、「その目に映して」という欲望はやはり一歩目であり、次段階の欲望のステージは「声を掛けてみよう触れてみよう」へと移行する。あたしとあなたの関係が深まるにつれて、あなたを認識するための必須の感覚としての視覚の地位は揺らぎ始める。

目を開けたらあなただけがいる 目を閉じるだけで浮かんでく  
る

aiko〈夢見る隙間〉

離れられずに離れたくても目を閉じても閉じなくてもあなただけ  
らけ

aiko〈プラマイ〉

あたしは目を閉じていてもあなたが“見える”ようになる。ここではもはや“正しい認識”を行う視覚は存在しない。常にあなたが浮か

ぶ状態であるあたしに、あなたを捉えたのは本当に「目」であるかの確証はない。あたしにとっては目を閉じていても開けていてもあなたの視像は変わらない。ここで視覚の客観性・信頼性に疑念が生まれてくる。

何億光年向こうの星も 肩に付いた小さなホコリも すぐに見つけてあげるよ この目は少し自慢なんだ 時には心の奥さえも 見えてしまうもんだから 頬は熱くなって たまに悲しくもなった

(中略)

交差点で君が立っていても もう今は見つけられないかもしれない 君の優しい流れる茶色い髪にも 気付かない程涙にかすんでさらに 見えなくなる全て

aiko〈アンドロメダ〉

〈アンドロメダ〉ではあたしの「目」があなたとの関係によって変わっていくさまを描いた曲である。あたしの目はあなたに対して非常に敏感である。見え過ぎてしまうあたしの「目」は時に悲しいことを伝える。「心の奥」を実際に見ることは不可能であるが、あなたに現れた反応や仕草から読み取った「心の奥」を見たのである。

既に述べたことを繰り返すが「あらゆる「心」なるものは、何らかの身体表現として示されない限り、他者と共有される形態をもたない」<sup>65</sup>のだ。視覚的に（または聴覚的に）捉えたあなたの振る舞い（や言葉）が時にあたしに悲しみをもたらしている。「悲しいこと嫌なこと見える目（聞こえる耳）」と表されることはこのことにも由来するだろう。目は外部の世界の認識の役割を担うもの、つまりあたしとあなたの世界の外部からの情報を捉えてしまう。バルトは「恋愛の繊細にとっては、事実というものはすべて、なにかしら攻撃的などころをそなえている」<sup>66</sup>と指摘するが、外部の客観的（にみせかけた）事実（上述した〈今度までには〉における「一度だけ違った顔」のような）を捉える「目」はやはりあたしに「悲しいこと嫌なこと」を与えてしまう感覚なのだ。

〈アンドロメダ〉においてあたしとあなたの物理的にも心的にも距離が離れてしまった関係において、「自慢」であるはずのあたしの目はあなたの全てを映さなくなってしまう。視覚は、知性と密接な関係を持つため、あなたを拒否した脳が視像を歪曲してしまっているのだ。そして、あなたはついに視界から消えてしまう。〈アンドロメダ〉では、変わってしまった「視覚」と対照的に、願っても「変

---

<sup>65</sup> 小浜逸郎（2004）、前掲書、115頁

<sup>66</sup> ロラン・バルト（1980）、前掲書、210頁 211頁

わらない」触覚的記憶が描写されている。

あたしの髪がゆれる距離の息遣いやきつく握り返してくれた手  
はさらに消えなくなるのにな

aiko〈アンドロメダ〉

あたしの視覚は、あなたをもう見たくないというあたしの内在する意志により操作を受けるが、あなたの感触はすでにもうあたしの体に刻印されている。視覚的な記憶は、あたしの拒絶により探すことができないが、触覚的な記憶は探さずともすでに体に在るのだ。愛の感官としては、目よりも触覚が優位づけられていることがわかる。

視覚は、二人の関係の最初の段階において「認知」するための重要な知覚として機能しているが、あたしとあなたの愛の関係において、あなたを感知する感覚としての地位は揺らいでいる。ちなみに、上述した体の部位の登場数が最も多いものは「目」であったが、そこに表現されている「目」は純粹に何かを映す「目」ではないものとしての表現も多い。aikoは心の中や頭の中を、比喩として「目の奥」と表現することが多い。「あなたの目のその奥を知りたくない」〈間違い探し〉、「嘆きのキスに気付いてただろう 知っていても認

めたくない優しい目の奥」〈嘆きのキス〉) 視覚は、目に映ったものを客観性のある事実として差し出すがそれが「真実」であるとは限らない。バルトが写真をよく見るために目を閉じるように、歪曲された視像には映らない、また隠されてしまっている「真実」を映すものとして、「目の奥」と表現が現れる。そのことは、「目」はあくまで表層的な世界を映しているに過ぎないということを暗示しているようだ。

### あなたの「声」

では、あたしの「聴覚」はどうだろうか。聴覚は環境の変化を察知するために使われ、外部からの状況を提供する感覚である<sup>67</sup>。視覚とともに、外部の世界を認識するための重要な感覚として扱われてきた。そのため、「目」と同様に事実を与えるものとして「悲しいことと嫌なこと」が「聞こえる耳」と表現されているのだ。

しかし、あなたの「声」はあたしの愛着の対象である。人間の喉から発される聴覚的存在である声は、メルロ＝ポンティによれば「よりいっそう軽やかでいっそう透明なもう一つの身体」<sup>68</sup>であるよう

---

<sup>67</sup> 傳田光洋、前掲書、141頁

<sup>68</sup> メルロ＝ポンティ『見えるものと見えないもの一付・研究ノート』みすず書房、200頁

に、「声」とはあなたと同一化するものであり、あたしはあなたの声  
にあなたを想う。

少し癖のあるあなたの声耳を傾け 深い安らぎ酔いしれるあた  
しはかぶとむし

aiko〈カブトムシ〉

あなたと同一化したあなたの声は、音としてあたしの耳から体内  
に侵入する。その内部への浸透性ゆえ「深い安らぎ」をもたらすも  
のとして存在し得る。さらに、aikoは見えないものにまでも触感を  
与えようとする。

見違える程きれいにならないで 陽射しの強い日のまつげの影  
少しかすれた声を触った すべてを包み込んだ僕の腕

aiko〈もっと〉

「声」は触ることのできるものであり、抱きしめることのできる  
ものとして示されている。aikoの見えないものに触ろうとするその  
表現によって、声はあたしの愛撫の対象となるのだ。

明日は愛に変わりますように 願って眠ろうとした頃 いつも  
そう あなたの声ができるんだから

aiko〈格好いいな〉

聞こえないはずの音がする 体中が痺れてく裂けてく

aiko〈キョウモハレ〉

しかし、あなたの声は時に幻聴としてやってくる。「目を閉じても閉じなくてもあなただけ」の状態と同じであり、あなたは存在しないのに「音がする」のである。聴覚も視覚と同様、理性的認識をつかさどる感覚であったが、確実性のある感覚としての地位は危うくなる。そもそも、「声」とはバルトによれば「愛する人の消失を実証」し、「たちまちにして記憶と化するもの」であり、「死ぬことこそが声の特性」だという。声は「消え去ってのちに、はじめて存在しうるもの」なのだ<sup>69</sup>。声を感知したときには、すでに声は存在しておらず、頭の中に記憶として生きるものとなる。そのために、声は脳内においていつでも再生可能なのである。しかし、記憶と化した声はあなたの「消失を実証」させる。脳内にこだまする声、「聞こえない

---

<sup>69</sup> ロラン・バルト（1980年）、前掲書、171頁

いはずの声」はあたしにあなたの不在を伝える悲しい声なのである。

あたしにとって「声」とは、aiko の見えないものを触れようとする試みによって愛撫の対象となり得るが、その声はすでに死んだものであり、必ずしもあなたの存在を語るものではない。見えないものが見えたり、聞こえないものが聞こえたりするように、耳も目と同様にときとして誤りを生む。それはあなたを愛するうえで、確実性をもたらさない、不安の源泉として機能してしまう。客観性を装った事実を与え、あなたの存在を語ることのできない「目」と「耳」は、時にあたしに「悲しいこと嫌なこと」を差し出す感覚であるのだ。

### 愛の感官である「鼻」と「口」

それら目と耳と対になるように、あなたを愛するための道具として描かれた鼻と口唇であるが、なぜそれらはそうなり得るのだろうか。

降った雨と一緒に流れたあなたの味とにおいはあたしの気持ち  
だけ置いて行ってさ 手を入れて掴んで持って帰ってよ

aiko〈舌打ち〉

「あなたの味とにおい」はあたしのあなたへの気持ちを喚起させるものとして現れていることがわかる。あたしはその喚起を望んでおらず、むしろ「掴んで持って帰って」欲しいものだ。しかし舌の上や喉、衣服や体に付着したまま残ってしまう味と匂いは、あたしのその意志とは裏腹に、無意識的に気持ちを起こさせる。味覚と嗅覚は、無意識裏にあたしの内部を動かす力を持つものとして描かれる。

味覚と嗅覚は、知覚するためには刺激と直接的に触れ合わなければならず、そのため感情的かつ親密なものだと考えられている<sup>70</sup>。ブルーストは嗅覚と味覚は過去を再現するものとして他の感覚よりも優れていると考えていた。

長いあいだ魂のように残っていて、ほかのすべてのものが廃墟と化したその上で、思い浮かべ、待ち受け、期待しているのだ、その匂いと味のほとんど感じられないほどのしずくの上に、たわむことなく支えているのだ、あの巨大な思い出の建物を<sup>71</sup>

---

<sup>70</sup> キャロリン・パーネル、前掲書、100頁

<sup>71</sup> マルセル・ブルースト『失われた時を求めて1 第一篇 スワソン家の方へI』鈴木道彦訳、集英社、1996年、92頁

匂いと味は「鮮やかさ、持続力、非物質性、正確さなどのよって強力な遠い思い出の力を保持」<sup>72</sup>しているため、知的な思索によって思い出される記憶よりも鮮明なままの過去を差し出す。

あなたの両手は毛布 許してくれるなら 強く壊れぬ様に 思  
い出の帰る温かい匂いと共に抱きしめてほしい

aiko〈星のない世界〉

睫毛を通り堕ちるドロップ 唇に触れて味は苦い 忘れられな  
い 恋の味よ…

aiko〈こんぺいとう〉

aiko の歌詞においても匂いと味は記憶との関係が深い。〈星のない世界〉ではあなたとの思い出、あなたという存在はあなたの匂いによって想起させられるものとして描かれ、〈こんぺいとう〉では直接的に舌の上で感知した涙の味を「恋の味」として記憶される。のちに詳述するが、匂いはあなた自身を想起させるものであり、味は、「恋の味」や「愛の味」と表現することが多いように、あたしとあ

---

<sup>72</sup> シャンタル・ジャケ、前掲書、119 頁

あなたの恋愛を感覚的に捉えたときにそれを指し示すために選ばれる言葉が、「味」となるのだと考えられる。

## 匂いと心

あたしの鼻は、匂いだけではなくさまざまなものを伝えるものとして機能しており、あたしの嗅覚は非常に敏感である。

心なしか元気ない時は匂いで解る 鼻の利く利口な犬にもなっ  
てあげる

aiko〈白い服黒い服〉

優しい人に触れた時と同じ匂い 香る隣でいつまでも目を閉じ  
て座ってたい

aiko〈甘い絨毯〉

見透かされてる心の果てはどんな匂いがするのだろう 知らな  
い場所も解っているのでしょう

aiko 〈Aka〉

匂いは文字通りの匂いだけではなく、それ以上のものを伝えるも

のとしての意味を持ち、時にあなたの状態や優しさ、(〈Aka〉ではあたしの) 心の中を捉えるものである。

嗅覚は言語中枢との結合が貧弱なのだが、脳の中で記憶と情動をつかさどる海馬、側頭葉などは嗅覚中枢とコネクトしているのだという<sup>73</sup>。たしかに、ある匂いを言語化するのにはいささか困難であるように思える。あるとき嗅いだ匂いを誰かに伝えようとしても、結局は「いい匂い」だったとか、「臭い」とか、かなり限られた表現にとどまってしまう。あたしが感知した匂いも、具体的にその匂いを語ろうとするよりも、あなたの優しさを匂いとして捉えるように、心象風景は匂いという知覚を介して描かれることが多い。匂いは情動を強く動かす力を持っているため、心に作用する力も大きい。ルソーは「嗅覚は想像力の感覚である」とし、その匂い自体が「与えるものよりも、むしろ期待させるものによって影響を及ぼす」と述べている<sup>74</sup>。ホッブズは、ある嫌な匂いが他者からの匂いであれば嫌悪の対象となるが、自分自身からの匂いであれば嫌悪感はなく、その不快さは、「不健全であるその匂いによって侵害されるという概念」によるものであると考える<sup>75</sup>。単純にその匂いが快か不快かという

---

<sup>73</sup> 山下柚実『〈五感〉再生へー感覚は警告する』岩波書店、2004年、6頁

<sup>74</sup> ルソー、前掲書、252頁

<sup>75</sup> トマス・ホッブズ『哲学原論／自然法および国家法の原理』伊

だけでなく、他者との関係がそこには関わっているのだ。匂いの知覚は、自身の想像力によって左右されるものであり、嗅覚は主観的な性格が強いことがわかる。嗅覚とは、人の内面性と深く関わる感覚なのだ。

嗅覚によって心象風景を描くことで、その描写はやはり主観性を帯びる。「元気がない時の匂い」も「優しい人の匂い」も「心の果ての匂い」も当の本人にしか解り得ない。この歌詞を読む人すべてから等しく十分な共感を得ることはできないのではないか。嗅覚による描写は「あたしだけが知っている」あなたとのかかわりを描こうとする aiko の歌詞観をよく体現しているとも言える。

### 嗅覚が差し出す「あなた」

かすかに残ったニオイがかすって いつまで経っても涙が止まらないよ  
ここにあなたがいればなあ こんなあたしを笑い飛ばしたよね

aiko〈赤いランプ〉

ふと道で香ってた同じ匂いにこのまま 倒れてしまいそうだった

aiko〈愛のしぐさ〉

〈赤いランプ〉では自分の衣服や肌に付着していたあなたの匂いに、〈愛のしぐさ〉では突然現れたあなたの匂いに、あなたを思い出す。ここでは匂いの発生も、匂いの感知も、当人の意志に反して作動している。当人の意志が介在しないことがあたしの持つあなたの記憶を強制的に再現させる。あなたの匂いは、あなたそのものを現前させる。サルトルは『ボードレール』で、身体から放たれる匂いを嗅ぐことは、「肉体そのものを吸い込むこと」であり、つまりその「最も秘密の実体」を、「本性」を、所有することであるという。そしてある肉体の匂いは、「非肉体化され、気体」となった「揮発性の精神になった身体」であると明らかにしている<sup>76</sup>。身体から発散される匂いは、その人の内奥にあったものが表面化したものであり、そしてそれは決して目に見えることのない、その人の秘密の部分だ。しかし、その人の親密な部分に侵入しても、それはあくまで「気化」したものであり、真に所有することはできない。それはその人の幻

---

<sup>76</sup> サルトル『ボードレール』佐藤朔訳、人文書院、1956年、140頁

の身体であり、「親密性の儂い痕跡」<sup>77</sup>なのである。

さらに、匂いはその人の内奥から発散される、より親密なものであると同時に、嗅覚という感覚がもたらす記憶の力によって「あなた」はより鮮明なものとなる。嗅覚は、目に見えず消えやすいその性質のため意識的な保存が不可能である。しかし、それゆえ「知性による選別や歪曲の手をのがれ、無疵なまま心の奥深くで保持されることができる」<sup>78</sup>ため、嗅覚による記憶はまるで真空パックでそのまま保存したかのような新鮮さで過去を思い出すことができるのだ。プルーストが説いた身体的な感覚、特に嗅覚や味覚を触媒とした無意志的記憶は、表面的なイメージだけではなくそれに伴う感覚や感情も浮かび上がらせるが、それは不意に現れるものであり、意識的に検索することはできないものだという<sup>79</sup>。

あなたの匂いはその親密な性質と嗅覚の記憶の再現力の高さによってあたしの前にあなたを現わす。しかし、どれほどあなたを感じようと匂いを吸い込もうともあくまでそれは「肉を失い気化」した幻のあなたなのだ。〈赤いランプ〉や〈愛のしぐさ〉で、あたしの鼻に突然届くあなたの匂いは、無慈悲にも幻のあなたを連れて来る。

---

<sup>77</sup> シャンタル・ジャケ、前掲書、57頁

<sup>78</sup> 原田武、前掲書、67頁

<sup>79</sup> アン・ホワイトヘッド『記憶をめぐる人文学』三村尚央訳、彩流社、2017年、143頁

倒れてしまうほど、あなたと同じ匂いはあたしに強烈にあなたを思い起こさせる。あなたの匂いは、あなたへの欲望と愛を掻き立てる。しかし、そのあなたは幻であり、あたしにせつなさを残す。匂いがもたらすどうしようもない切なさは恋する者をどれほど苦しませ、あなたを切望させるものなのか。

### 性衝動を促す香り

しかし、あなたの匂いを嗅ぐことはもちろん切なさだけを連れてくるだけではない。あなたの身体から放たれる秘密の匂いを直接的に嗅ぐことは、性的な欲望も掻き立てる。そもそも人間の嗅覚は快樂主義を帯びているという<sup>80</sup>。快い匂いは性的な魅力と結ばれることがしばしばあり、香水の使用もそれに由来するところが大きい。aikoの歌詞における第三者としての「あの子」は“香る”存在として（第三者の存在は稀ではあるが）登場する。

あたしの背中越しに見てた その目の行き先を 香るあの子の  
甘い瞳を見ていたの？ 甘い仕草を見ていたの？

aiko〈二人〉

---

<sup>80</sup> シャンタル・ジャケ、前掲書、22頁

本当は受話器の隣 深い寝息をたててる バニラのにおいが  
する tiny な女の子がいたなんて

aiko〈二時頃〉

あたしのいわば「恋敵」である「あの子」は甘い香りを放っている。しかし、実際にあたしが嗅いだことがあるのかは定かではなく、甘い香りはあなたを夢中にさせる性的な魅力を持った存在であることを意味するモチーフとして描かれている。

快樂主義的性格を持つ鼻が好むものとして「花」の香りがある。それは人を匂いの快樂へ誘うものだ。aiko は、恋愛対象を、または恋愛そのものを「花」として例えることが多い。

いつかの花が咲いた 香るのは君からか花びらか

aiko〈ハナガサイタ〉

枯れていく季節に花があって ずっと鮮やかで立っているから  
摘んで僕だけのものにしたくって ちぎった所から黒くなって

aiko〈もっと〉

繰り返してきた春に僕はいつの日からか 隣にいる君じゃなく  
違う花食べた

aiko〈ハニーメモリー〉

「花」に比喻されているのは恋愛対象である「君」である。花のもつ可憐な見た目、放つ甘い香りからも、花は官能的なイメージを持っているが、「花」と例えられる恋愛対象は恋愛主体にとって官能的な誘惑に満ちた存在なのである。さらに、恋愛対象は恋愛主体から嗅覚的イメージによって認知される存在であることもわかる。

aiko が恋愛対象と香りをたびたび結びつけることは、香りが性的な意味と密接しているためであり、あなたに性的に魅了されるあなたにとって、「香り」は切っても切り離せない対象なのである。

### 「味」の快樂

たとえばその胸 耳のうしろのにおいがのどを通ったな  
ら あたしはあなたなしでは生きてゆけない体になるだろう

aiko〈恋墮ちる時〉

あたしにとってあなたの匂いがあなたを愛する上で重要視されているか述べてきたが、この歌詞もまたあなたの「におい」があたしにもたらす作用を描く。あなたの「におい」を体内に取り入れることで、あなたという快樂に溺れてしまい、もうそこからは抜け出せなくなるといった表現がされているが、これは嗅覚的であると同時に味覚的でもある。

通常 of 嗅ぎ方としては鼻孔から匂いを吸い込む嗅ぎ方であるが、食べ物を味わう際の嚥下（飲み下す）の動作により、わたしたちは内から外に香る匂いを嗅ぐという、人間特有の嗅覚があるのだ<sup>81</sup>。

「においがのどを通」という匂いの取り入れ方は食を味わうときの嗅ぎ方に近い。何かを味わうためには匂いを感知する働きは必須であり、料理が放つ匂いは食欲をそそらせる。ブリヤ・サヴァランは「嗅覚の参加なくして味の完全な鑑定はありえない」とし、「嗅覚と味覚は結局のところ一つの感覚にほかならない」とまで主張した<sup>82</sup>。匂いと味は非常に密接な関係を持っており、〈恋墮ちる時〉では嗅覚と味覚は同時にはたらいっている。

---

<sup>81</sup> エイヴリー・ギルバート『匂いの人類学—鼻は知っている』勅使河原まゆみ訳、ランダムハウス講談社、2009年、135頁

<sup>82</sup> ロラン・バルト、ブリヤ＝サヴァラン『バルト、〈味覚の生理学〉を読む 付・ブリヤ＝サヴァラン抄』松島征訳、みすず書房、1985年、71頁（ブリヤ・サヴァラン『味覚の生理学』の部分から引用したものである）

バルトは「食事は内的快楽を誘発」するものであり、味覚による快楽は「粘膜の秘部のすみずみまで広がるもの」であると考えた<sup>83</sup>。味覚的にあたしの体内に取り入れられたあなたの「におい」はひときわ強い快楽を誘発させるため、あたしはその快楽を味わってしまえば戻れないと自覚するのだ。

「あたしのものになったらいいな」

似たような表現がされているものが他にもある。

何度も飲み込んだキスが体の中回る

aiko〈キスが巡る〉

キスが喉を通過して体内に巡る様子は、食事に似ている。食べることは、所有と消化によって完成に至る行為である<sup>84</sup>。飲み込まれ、体の中を回ると表現されるこの「キス」は、食べものと同様に体内に消化されている。唇の接触は「外なる他者を絶えず内へとうなが」す行為であり、唇とは「わたしたちの内奥が露呈」した「エロスの

---

<sup>83</sup> 前掲書、6頁

<sup>84</sup> 原田武、前掲書、177頁

場」であると松浦寿輝は考える<sup>85</sup>。接吻の誘惑とは、唇を通じてあなた自身を体内に取り入れたいという欲望の現われからなるものなのかもしれない。あなたを所有することは、恋愛における目標である。アウグスティヌスは、愛するとはなにかを欲求することであり、その欲求とは愛の対象を所有し保持したいという欲求であると考え<sup>86</sup>。しかし、上述したように、他者を手に入れることは不可能である。ただ、あなたが絶対的な所有が不可能な「他者」であるからこそ、あたしの官能は煽られるのだ。あなたをあたしのものにしたいという願いは、〈だから〉ではあなたをわかりたいと「触れる」ことに託した。〈キスが巡る〉では、唇を通してあなたを体内に取り入れるようなキスをする。この味覚的なあなたの取り入れ方は、探求としての触覚よりもあなたの匂いによってあなたの体を現前させるはたらきに似ている。しかし、気化した匂いより、物質的な形をもって飲み込もうとする、味覚的な、食事のようにあなたを体内に吸収させようとする行為には、あなたを所有したいという欲望がより明確になる。

---

<sup>85</sup> 松浦寿輝『口唇論 記号と官能のトポス』青土社、1985年、20頁・21頁

<sup>86</sup> ハンナ・アーレント『アウグスティヌスの愛の概念』千葉眞訳、みすず書房、2002年、15頁

頬のうぶ毛も閉じてる瞳も長いまつげも あたしのものになっ  
たらいいな なんて考えてる

aiko〈あの子へ〉

見つめられる前にあたしが見つめる ねえ気付いて ほしくて  
近づいて触れてあなたのうぶ毛に口づけてみたい

aiko〈恋墮ちる時〉

あたしはあなたの「うぶ毛」や「まつげ」という部分的な場所に  
欲望を感じている。そのような細かい部分まで、あなたの隅々まで  
を所有したいという隠喩でもあろう。「あたしのものになったらいい  
な」という所有願望の現われが、「あなたのうぶ毛に口づけてみたい」  
である。松浦寿輝が、唇とは「存在の内と外とを繋ぐ蝶番」である  
というように、唇をまたいだ越境行為により外部のものを自己に取  
り入れることが可能となる<sup>87</sup>。あたしの唇とは、あなたをあたしの体  
内へ導こうとする場として機能する。うぶ毛を所有したいというあ  
たしの欲望は「口づけ」によって果たされようとしている。

この唇によるあなたの導入は、体内への消化という食事に近い行

---

<sup>87</sup> 松浦寿輝（1985年）、前掲書、22頁

為と触覚的な触れる行為のどちらのはたらきであるとも考えられるが、より食事的な、「味」や「食べる」という表現がなされる歌詞もみてみたい。

性欲と食欲は結びついているとしばしばいわれる。味の知覚は性的衝動に影響を及ぼす辺縁系と結びついていると言われており<sup>88</sup>、博物学者たちは、かまきりの雌が交尾中かそのあとに雄を食べてしまうという習性から性欲と食欲の関係を論じている<sup>89</sup>。さらに、ロジェ・カイヨワは人間の性交の際の愛咬は、このかまきりなどにみられる行為の近似現象であると考え<sup>90</sup>。aikoの歌詞においてもあたしがあなたを噛む描写は若干だが存在する。

あなたの首筋に噛みついて絶対離れはしないよ 呪文の様に

aiko〈愛の世界〉

抱きしめてくれた時 左肩を噛むと「痛いなあ」と目を合わせてくれるから またやった

---

<sup>88</sup> リチャード・E・サイトウィック、デイヴィッド・E・イーグルマン『脳のなかの万華鏡―「共感覚」のめくるめく世界』山下篤子訳、河出書房新社、2010年、168頁

<sup>89</sup> ロジェ・カイヨワ『神話と人間』久米博訳、せりか書房、1994年、52頁

<sup>90</sup> 同書、58頁

aiko〈遊園地〉

このあなたを嘔む行為に食欲が混在しているかはこの歌詞だけでは解釈できず、〈愛の世界〉では「呪文」と例えていることから、あたしのものであるという印とも考えられるし、〈遊園地〉ではあたしの無邪気で構って欲しいがための特に意味もない行為にも思える。しかし、あなたに嘔みつくことという恐ろしさや狂気さえ感じる行為を歌詞において描写するラブソングは少ないだろう。その行為の明示的な言及をしているということはさらなる裏の意味の存在を感じずにはいられない。

ぬるく熟した恋愛を食べる瞬間は あなたと迎えたい

aiko〈恋愛〉

さまざまな色を食べて花びら色に染まった息はたちまち二人を  
繋ぎ思いがけない力をくれた

aiko〈ふたつの頬花〉

隣にいる君じゃなくて違う花食べた

aiko〈ハニーメモリー〉

これらは、「食べる」という表現がなされた歌詞の箇所である。〈恋愛〉における「ぬるく熟した恋愛を食べる」という表現は旧約聖書における、アダムとイブが食べた「禁欲の果実」を思わせる。〈ふたつの頬花〉における「さまざまな色」の指示は定かではないが、「二人を繋いだこと、aikoの歌詞において性的な意味が付与される「花」を用いていることから、二人の愛を作りあげるような経験を意味しているのだろう。〈ハニーメモリー〉の一節もまた「君ではない違う女の子と恋愛をした」というのが大まかな意味だろう。共通するのは、「恋愛」や、また恋愛対象や恋愛経験を「食べる」と表現されていることだ。「食べる」と「恋愛」の繋がりがaikoのなかで存在していることが伺える。

さらには上述したように、恋愛を「味」として表現することも多い。

生きてる限り何度も触れて知るの あなたのあたたかい味永遠  
に

aiko〈ずっと〉

あたしにとってあなたのすべてが愛の味

aiko〈ナキ・ムシ〉

あたしにとって、恋愛とは食べることのできる、味わう対象として示される。「恋愛」を味覚的に表現することは、性欲と食欲との間に関わりがあること、恋愛があなたを所有したいという願望を持つ営みであること、と関係があると考えられるだろう。食べることは、人間の内奥からの快樂をもたらすものであり、恋愛もまた自身の快樂を満たす側面とは切り離せないものである。さらに、食べることは栄養を体内に摂取すること、つまりは所有の行為であり、恋愛についても他人を所有したいという欲望が恋愛主体に密かに内在するものだ。つまり、恋愛とは食べる行為と近似しているといえるだろう。aikoが、「あなた」を、また「恋愛」を、味覚的に捉えることは、恋愛の性質から考えると頷けるものである。そして、味覚的に捉えられた「恋愛」は、上述した味覚のもつ記憶を再現する力を借りて、より鮮明にあなたとの恋愛をあたしに記憶させることが可能となるのだ。

あたしの鼻と口唇は性的な快樂を得ることと密接に結びついた感官として、あたしとあなたのかかわりにおいて大きく機能している。「大好きな」あなたを「大好き」たらしめる欲望を探求する感官として、「あたしの鼻とこの唇　それで十分」だとまでされるに至るだろう。

さらに、「愛の塊」と表された「指先」＝触覚も含め、それらはあなたとあたしの境界を越える、また越えようとする感官である。そこには、あなたの中へ侵入したい、あなたと交わりたい、ひとつになりたいという恋愛の最たる欲望が委ねられている。そのように、aikoの歌詞において、鼻や口唇、指先は、愛の感官としては目や耳よりも優位なものとして位置付けられている。

#### あたしの感覚の言語化という挑戦

aikoの歌詞における、特に〈何時何分〉において示されていた感官を頼りに、あたしの感覚がどのようにあなたとのかかわりについて意味を発生させ、機能を果たしているのかを探ってきたが、それによってaikoがあたしとあなたの世界を描くために、いかに感覚体験を頼りにしているかがわかった。

あたしの触覚はあなたへの探求と世界の確信と、視聴覚は認識と時に悲しみを、嗅覚と味覚はあなたの記憶と性的な欲望を与えるものとして、あなたとあたしのかかわりにおいて不可欠なものである。

「感覚は現在という時間相と不可分に結びついている」と篠原資明は考える<sup>91</sup>。なにかを感知したこの瞬間は、過去でも未来でもなく、

---

<sup>91</sup> 篠原資明『五感の芸術論』未来社、1995年、63 - 63頁

今、この現在の時間でしかない。感覚体験は現在を現在たらしめるものである。aiko はあなたとあたしのふれあいの時間を、感覚によって描くことによって、あなたとのあの時間を今現在に連れてこようとしている。あなたとの時間を、過去に閉じ込めず、なんとか現前させたいと願いが、aiko をあたしの感覚の表現に駆り立てているのだろうか。恋愛という精神の営為を、見えない感情の交錯を、あたしの目で、耳で、皮膚で、鼻と舌で、見えないものに存在を与えようとしている。「愛」は熱を帯び、「言葉」は触感を持ち、味と匂いであたしの想いは蘇るように、抽象的な事象を具体的に捉えようとしていた。

しかし、どうしても過去は過去であり、現在性を保ったままあの瞬間を導くことは不可能である。さらには、感覚体験とは知性的な言語化とは相容れがたい体験である。しかし、その感覚体験を言葉にしなければその体験は閉じ込められたままなのである。「言語はあらゆる経験を顕在化する力を持っている」<sup>92</sup>と屋良がいうように、言語化することによって初めてその体験は「ここ」に現れることが可能になる。

そもそも個人的なものである「恋愛感触が伝達機能を備える言葉

---

<sup>92</sup> 屋良朝彦、前掲書、36 頁

とは別の位相に在る以上、わたしがあなたの感触をわかることは根源的には不可能」<sup>93</sup>であると内藤千珠子はいう。また、松浦寿輝は、わたしたちが生きる現実は「〈知〉も観念も介入しえないなまなましくも無媒介的な生の環境」であるが、意味を伝達しようとする瞬間にその「生の時空」に「言葉の濁流が氾濫」し、あらゆるものが「命名し尽された表層的な環境」になる、と述べる<sup>94</sup>。

わたしたちが知覚する感触は、言葉とは存在する次元を全く異にするものである。わたしたちが生きたあの瞬間を現出させようとするとき、この次元の狭間に捕らわれてしまうのだ。

しかし、屋良が「表現の欲求は永遠に満たされることはない」が、「知覚経験を語りおおせないからこそ、かえって表現を動機づけられる」と考えるように、言葉を紡ぐ者は、言葉が氾濫する世界を知るからこそ、わたしたちの生々しい現実を死なせないための言葉への探求心を燃やし続けているのかもしれない。

aiko は、「エロは欠かせない」と言い、あたしとあなたの「エロ」の瞬間、その生々しいふれあいの「その瞬間にギリギリまで近づいて」、「その時に感じたことを覚えておきたいから歌詞にしている」

---

<sup>93</sup> 内藤千珠子、前掲書、20 頁

<sup>94</sup> 松浦寿輝（1985 年）、前掲書、199 頁

と語る<sup>95</sup>。

あたしの感覚体験を、あたしではない他者に伝えることは本質的に叶わないことである。しかし「あたしの髪が揺れる距離の息遣いやきつく握り返してくれた手」(〈アンドロメダ〉)の感触こそが、恋愛を描く aiko にとって愛しく儂い最も大切な瞬間であり、最も現在にまで導きたい瞬間なのである。aiko は、22年の歌手活動を経ても依然として感覚体験の歌詞化をやめない。叶わない願いだからこそ、完全に言語に還元できないあたしの感覚体験を言葉にしたいという願いを抱き続け、今もなお格闘を続けているのだ。

---

<sup>95</sup> 『SWITCH vol.38 No.6』、前掲記事

## 結論

aiko は「あなただけに解る」「二人だけの世界」を、そして「あたしだけが知っているあなたの特別なところ」をテキストにするため、言語によって分類しつくせないあなたを、外部から隔絶された「ふたりだけの小宇宙」を、そしてあたしにしか感知できない経験をそこに表現しようとした。「わたしにとっても特別な感触」は、「恋愛という言葉をあてた瞬間」、「誰にとっても特別な恋愛へとすりかえられ、あなたはありふれた風景のなかの要素になりさがる」<sup>96</sup>。aiko もまたそれを自覚し、しかしそれに抗う。aiko の歌詞に生み出された「あたし」と「あなた」は、あたしはあたしだけの特別を持ち、あなたは誰にも還元されることのないあなたであろうとしているのだ。

泣いても泣いても叫んでも届かない想い心ごと 届けるが為に  
枯れるまで 彼女は歌う 憂鬱な恋に混乱した欲望と頭を静め  
よ 頬を赤らめて瞳を閉じてがんばれ歌姫

(中略)

おじけづいてた爪の先がりのままの文字をつづった

---

<sup>96</sup> 内藤千珠子、前掲書、8頁

ミツメテ コワシテ ダキシメテ あなたの所へ…

aiko〈歌姫〉

何でもかんでも飲み込んで カラスの様に歌い散らかすのでし  
ょう 辛い花も甘い花も飲み込んで 青い歯で食べて唇から  
さ 笑い話にするんでしょうね

aiko〈遊園地〉

歌詞の中には、aiko 自身が恋愛を歌にして歌うことについて言及したものもある。〈歌姫〉と〈遊園地〉に描かれる「あたし」のスタンスは若干異なっているが、〈歌姫〉ではどうやっても届かない想いをそれでも歌に乗せて届いてほしいという願いを託しており、〈遊園地〉では（ここでも恋愛を花にたとえている）、過ぎ去った恋愛たちを笑い話に昇華するための歌として存在している。

恋愛を言葉にする困難を語ってきたが、そもそもあなたへの愛をあなたに届けようとする試みはいつだって困難である。バルトは、記号は何も愛の証明にはならず、結局言葉の全能性へと向かわざるを得ず、「たえずあの人に対し、わたしが愛していることを言う」し

かないのだと述べ愛の証明の困難を示す<sup>97</sup>。

今日も愛してるの 今日もしっくりいかないの 他に言葉はな  
いんだろうか

aiko〈愛は勝手〉

言葉にすると軽くなりそうだけど何度も言うわ「好きよ」

aiko〈17の月〉

aikoが、どれほどあたしの経験を繊細に感覚的に描こうとしても、あなたを表現することに気を遣っても、結局あなたに愛を伝えるための手段は「好き」か「愛してる」という言葉に頼らざるを得ないので。あなたに思いが届かないことを「泣いて泣いて叫」ぶほど、苦しんで、もがいて、あなたに届かない持て余した想いを、混乱した頭を必死に制御しながら「爪の先」(〈歌姫〉)から歌という形に託している。

しかし「愛のエリクチュール」は、その存在だけでは「いとしい人に自分を愛させることにはなら」ず、「エリクチュールはまさしく

---

<sup>97</sup> ロラン・バルト (1980年)、前掲書、320頁

あなたのいないところにあるのだ」とバルトはいう<sup>98</sup>。aiko のファーストアルバムに収録された〈歌姫〉と11枚目のアルバムに収録された〈遊園地〉とは、およそ15年の隔りがある。届かない想いを届けるための歌が、決してあなたにこの愛を贈るものにはならないことを、何百曲と「愛のエリクチュール」を描き続けてきたうちに、aiko はそう思わざるを得なかったのだろうか。〈遊園地〉で「歌い散らかす」様子は愛の歌が届かないことに開き直った結果なのかもしれない。「愛について書こうと望むのは、言語のぬかるみ、言語が過剰にして過少であるところ…あの狂乱の地帯に、立ち向かうことなのだ」<sup>99</sup>。

恋愛は自分とは異なった存在である他人と向き合うことであり、ついに相手をわかることはできない。aiko はそのわからなさがあるからこそ恋愛の曲を描くことが「楽しい」と語る<sup>100</sup>。恋愛を書くという、困難を強いられる出口のない「狂乱の地帯」だからこそ、aiko は表現へとこれからも向かい続けるのだ。

---

<sup>98</sup> 同書、151頁

<sup>99</sup> 同書、150頁

<sup>100</sup> Yahoo ニュース『「胸が痛くなるような恋愛の感情は、10代の頃と今も一緒」 - aiko、ラブソングと歩んだ21年』

<https://news.yahoo.co.jp/feature/1346>、(最終閲覧 2020年12月20日)

### 〈参考文献一覧〉

アッカーマン、ダイアン『感覚の博物誌』岩崎徹・原田大介訳、河出書房新社、1996年

アリストテレス『魂について』中畑正志訳、京都大学学術出版会、2001年

アーレント、ハンナ『アウグスティヌスの愛の概念』千葉真訳、みすず書房、2002年

伊藤雅光『Jポップの日本語研究：創作型人工知能のために』朝倉書店、2017年

原まゆみ訳、ランダムハウス講談社、2009年

小川博司『音楽する社会』勁草書房、1988年

大森荘蔵『大森荘蔵著作集 第五巻』岩波書店、1999年

カイヨワ、ロジェ『神話と人間』久米博訳、せりか書房、1994年

カント『カント全集 人間学』渋谷治美・高橋克也訳、岩波書店、2003年

岸田秀『ものぐさ精神分析』中公文庫、1982年

ギルバート、エイブリー『匂いの人類学―鼻は知っている』勅使河の驚くべき感覚世界』藤井千絵訳、白水社、2019年

小浜逸郎『エロス身体論』平凡社、2004年

小浜逸郎『「恋する身体」の人間学』筑摩書房、2003年

サイトウィック、リチャード・デイヴィッド・E・イーグルマン『脳のなかの万華鏡―「共感覚」のめくるめく世界』、山下篤子訳、河出書房新社、2010年

サルトル『ボードレール』佐藤朔訳、人文書院、1956年

篠原資明『五感の芸術論』未来社、1995年

ジャケ、シャンタル『匂いの哲学―香りたつ美と芸術の世界』監訳者岩崎陽子、訳者北村未央、晃洋書房、2015年

セール、ミッシェル『五感 混合体の哲学』米山親能訳、法政大学出版、1991年

傳田光洋『皮膚感覚と人間のこころ』新潮社、2013年

内藤千珠子『小説の恋愛感触』みすず書房、2010年

パーネル、キャロリン『見ることは信じることではない 啓蒙主義  
原田武『プルースト 感覚の織りなす世界』青山社、2006年

バルト、ロラン『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1985年

バルト、ロラン、ブリヤ＝サヴァラン『バルト、〈味覚の生理学〉を読む 付・ブリヤ＝サヴァラン抄』松島征訳、みすず書房、1985年

バルト、ロラン、『恋愛のディスクール・断章』三好郁郎訳、みすず書房、1980年

プラトン『饗宴』久保勉訳、岩波文庫、1952年

プルースト、マルセル『失われた時を求めて1 第一篇 スワン家の方へI』鈴木道彦訳、集英社、1996年

ホッブズ、トマス『哲学原論／自然法および国家法の原理』伊藤宏之・渡部秀和訳、柏書房、2012年

ホワイトヘッド、アン『記憶をめぐる人文学』三村尚央訳、彩流社、2017年

増田聡『聴衆をつくる－音楽批評の解体文法』青土社、2006年

松浦寿輝『口唇論 記号と官能のトポス』青土社、1985年

松浦寿輝『謎・死・闘－フランス文学論集成』筑摩書房、1997年

見田宗介『近代日本の心情の歴史－流行歌の社会心理史』講談社、1978年

メルロ＝ポンティ、モーリス『見えるものと見えないもの－付・研究ノート』滝浦静雄・木田元、みすず書房、1989年

山口創『皮膚感覚の不思議 「皮膚」と「心」の身体心理学』講談社、2006年

山下柚実『〈五感〉再生へ－感覚は警告する』岩波書店、2004年

屋良朝彦『メルロ＝ポンティとレヴィナス－他者への覚醒』東信堂、2003年

ルソー『エミール（上）』今野一雄訳、岩波文庫、1962年

レヴィナス『全体性と無限』合田正人訳、国文社、1989年

〈参考サイト・雑誌一覧〉

・「aikoOfficialWebsite」、<https://www.aiko.com/>（最終閲覧 2021年 1月 20日）

・excite ニュース「aiko の歌詞「あたし率」はどれくらい？」  
<https://www.excite.co.jp/news/article/E1585289379486/>（最終閲覧 2020年 12月 20日）

・「公益社団法人 日本薬学会 薬学用語解説」、  
<https://www.pharm.or.jp/dictionary/wiki.cgi?細胞分裂>（最終閲覧 2020年 12月 14日）

・『SWITCH Vol.38 No.6』、「うたのことば」、スイッチパブリッシング、2020年

・Yahoo ニュース「「胸が痛くなるような恋愛の感情は、10代の頃と今も一緒」 - aiko、ラブソングと歩んだ21年」  
<https://news.yahoo.co.jp/feature/1346/>（最終閲覧 2020年 12月 20日）

〈参考楽曲一覧〉

【aiko の参考楽曲】（年代順）

※「aikoOfficialWebsite」、<https://www.aiko.com/>（最終閲覧 2021

年 1 月 20 日）を参照

年代	曲名	作詞者	作曲者		
1999	ナキ・ムシ	AIKO	AIKO		
	二時頃				
	歌姫				
	恋堕ちる時				
	親指の使い方				
	カブトムシ				
2001	脱出	AIKO	AIKO		
	あの子へ				
2002	水玉シャツ			AIKO	AIKO
	今度までには				
	愛の世界				
2003	アンドロメダ				
	ふたつの頬花				
	すべての夜				

	彼の落書き		
	白い服黒い服		
2004	かばん		
2005	愛のしぐさ		
	恋人同士		
	スター		
	こんぺいとう		
2006	その目に映して		
	赤いランプ		
	恋ひ明かす		
	深海冷蔵庫		
	17の月		
2007	星のない世界		
	恋愛		
2008	二人		
	キョウモハレ		
2009	嘆きのキス		
2010	戻れない明日		
	キスが巡る		

	リズム		
	甘い絨毯		
2011	いつもあたしは		
	瞬き		
	ずっと		
2012	Aka		
	ドレミ		
	白い道		
	くちびる		
2014	舌打ち		
	染まる夢		
	卒業式		
	透明ドロップ		
	遊園地		
	キスの息		
2015	夢見る隙間		
	プラマイ		
	合図		
	4秒		

2016	もっと		
	何時何分		
	愛だけは		
	大切な今		
	夏バテ		
2017	間違い探し		
2018	格好いいな		
	愛は勝手		
	ハナガサイタ		
	だから		
2020	ハニーメモリー		
	心焼け		

【aiko 以外の歌手の参考楽曲】（年代順）

年代	曲名	歌手名	作詞者	作曲者
1983	クリスマス・イブ	山下達郎	山下達郎	山下達郎
1994	innocent world	Mr.Children	桜井和寿	桜井和寿

	クリスマス	JUDY AND MARY	YUKI	恩田快人
2015	幸せになりた い	あいみよん	あ い み よ ん	あいみよん
	Good Bye	中島美嘉	中島美嘉	CREAM
2016	あなたの好き なところ	西野カナ	Kana Nishino	Carlos K・ Yo-Hey
2020	あなたの STORY	矢井田瞳	矢井田瞳	矢井田瞳

※参考サイト

・山下達郎オフィシャルサイト、<https://www.tatsuro.co.jp/>（最終  
閲覧 2021年1月10日）

・Mr.Children オフィシャルサイト、<http://www.mrchildren.jp/>（最  
終閲覧 2021年1月10日）

・ JUDY AND MARY オフィシャルサイト、  
<https://www.sonymusic.co.jp/artist/JudyAndMary/>（最終閲覧  
2021年1月10日）

・あいみよんオフィシャルサイト、<https://www.aimyong.net/> 最終  
閲覧 2021年1月10日）

・中島美嘉オフィシャルサイト、<https://www.mikanakashima.com/>

(最終閲覧 2021 年 1 月 10 日)

・西野カナオフィシャルサイト、<http://www.nishinokana.com/> (最

終閲覧 2021 年 1 月 10 日)

・矢井田瞳オフィシャルサイト、<https://yaiko.jp/> (最終閲覧 2021

年 1 月 10 日)